

Complete Second Season



THE Peke-Files

Little Mustapha

"the Peke Files "

the Complete 2nd Season

Book #4

Little Mustapha

主な登場人物

これはシーズン2全体の登場人物紹介なので、全ての話にここに出てくる人物が登場するとは限りません。

オックス・モオルダア・ムスタファ

FBI（エフビーエル）特別捜査官。天才的推理と「少女的第六感」で数々の難事件を解決：…するのか？ふとしたことから自分が正規の捜査官ではなくてバイトであると知りショックを受ける。特別捜査官の「特別」とはそういう意味だったのか？ そういうこともありシーズン2のモオルダアは自信喪失気味な感じもある。

ダナア・スケアリー・ザ・プリンセス

モルダアのパートナー。死体を切り刻むのが大好きな検死官。（無免許）常に冷静であり完璧でエレガントであると思っている。たまにはそのとおりになることもあるが、それが高じてうぬぼれにつながることも。またいろいろなことにコンプレックスを抱いているような一面を見せることもある。

アンタモ・スキヤナー

FBI副長官。モルダアたちに上から指示を出す人。シーズン1では一番偉い人だったが、シーズン2になるとエフ・ビー・エルにはその他の偉い人が出てくるようになり、彼は板挟みの中間管理職みたいな立場になってしまう。一応、モオルダアとスケアリーのことを第一に考えようという気はあるらしい。一応、直属の上司だから。一毛が薄いので髪は短くしている。ハゲを隠さないといういさぎよい一面もあるということ、なの？

ミスター・ペケ

隠居した怒^{ドドメキ}百鬼^{ツマ}鐵^{マル}円ドドメキに変わってモオルダアやスケアリーにいろいろ裏情報を教えてくれる謎の人物。ドドメキとは違い常に威圧的な態度でモオルダア達に接する。

ウイスキー・ドリinkingマン

常にウイスキーをラップ飲み。闇の組織の一員。裏で糸を引く男。色々たくらむ男。(酒がなくなると急に弱くなる?)

蔵衣地・A・ロドリゲス

ハーフのような名前だが、純粋な日本人。便宜上たいていの場合「クライチ君」と呼ばれるので、下の名前はどうでもいいのである。

ペケファイルの二人の足を引っぱるだけでなく、闇の組織の手先でもある。ただし常に自分の都合を優先させる性格なので、どこの「闇の組織」の手先になるかは展開次第。

ローン・ガマン

政府や社会の裏に渦巻く陰謀を暴こうとしている秘密組織。作者の都合で新しく誰かを登場させるのではなく、これまでに登場した人物を起用することにした。

ヌリカベ君

化学やハイテクに関することに詳しい。無口すぎて必要なことすらなかなか話さない。彼が唯一の「ローンガマン」の正式メンバーである。ヌリカベ君はメンバーが二人以上になると「ローン・ガメン (manの複数形でmen)」に名前を変えなくてはいけないのではないかと考えていて、そうすると名前の由来である「ローンを我慢する」という意

味がなくなってしまふので、彼以外がメンバーにはいることは認めていない。

大学時代は演劇部で死体役や壁の役を専門としていた。常にダークなオーラで人々をゾッとさせる。

元部長

ヌリカベ君のいた大学の演劇部で部長をしていたが、演劇とギャンブルに没頭していたため学業がおろそかになり大退学をする。ちょうど同じ頃大学院を辞めた先輩のヌリカベ君が始めた「ローンガメン」のアジトに居候している。得に特殊技能があるわけではないが「演劇じみた演技」は得意である。

フロシキ君

詳細は未設定。本家「エックスファイアイル」に合わせるなら「ローンガマン」は三人いないといけなないので、そのうち三人で登場するかも知れないし、しないかも知れない。

エフ・ビー・エルの職員たち

物語の進行上に得に意味がない限り、彼らはエキストラである。エフ・ビー・エルのビルディングで忙しそうに動き回っているが、実はそれはただビルの中を歩き回っているだけで、その行動に目的があるわけではない。

その他

エピソード毎に紹介。

#020 「六匙」

まえがき

これは the Peke-Files : Season 2 の最終回ですが、なぜか the X-Files : Season 2 の最終回のネタバレを大量に含んでおります。なので、the X-Files : Season 2 をまだ見ていなくて、内容を知りたくないという方は読まない方が良いでしょう。

或いは the X-Files : Season 2 の最終回を今回の話のパロディと思って見ることも可能です。そんなことをする人はいないと思いますが。

1 朝的那場保家

「昨日の地震はかなりでえかったんでねえんべかな！」

那場保権ナバホゴノシヨウ之小の息子は食卓で年老いた父親に向かって興奮気味に話していた。ゴンノシヨウは虚ろな目で息子が話すのを聞いていたが、最後に頷いただけで特に話を広げようとはしなかった。

そこへゴンノシヨウの孫、那場保権多ナバホゴノタがやって来た。

「ちよいとサイクリングに行つて来るだけな！」

どこの訛りか解らない喋り方のゴンタに父親は「だべな」と良く解らない返事をした。それを聞いて出かけようとするゴンタをゴンノシヨウの言葉が引き留めた。

「蛇たちは気が立ってるでえの。見付けても関わらねえことだっちゃ！」

ゴンタは迷信深い祖父の言うことの正確な意味は解らなかったが、いずれにしても蛇を見付けても捕まえたりするような趣味はないのでそのまま頷いて玄関へと向かった。

ゴンタの父にはゴンノシヨウが何かを言わんとしていることが良く解る。なにしろ生まれてからずっと、ゴンノシヨウの遠回しな抽象的な詩のような話を理解したようなしなないような感じで育ってきたのだから。おそらく昨晚の地震と関係があるのだろう。

「何があるべな？」

ヘンな訛りでゴンノシヨウに聞くとゴンノシヨウは全てを悟った表情を変えずにこたえた。

「あなどんでけえくゆれとりましらほんまものにまじであらねばでてきちまうつペな！」

ゴンノシヨウは誰にも理解出来ないようなヘンな方言で説明した。おそらく、真実が姿を現すとかそんな事を言っているのだろうとゴンタの父は思った。ゴンノシヨウは昔からそんな事ばかり言っていたのだから。

ゴンタは彼の住む土井那珂村の山道を高校の入学祝いに買ってもらった自慢の12段変速の自転車で走り回った。それから1時間も経たないうちにゴンタは明らかな動揺を顔に浮かべて戻ってきた。

「ヘンなもんさでござんす！」

何と言っているのか良く解らないが、ゴンタに声をかけられた父と祖父は表情を曇らせて玄関先へと向かった。そこにはゴンタが運んできたミイラ化した遺体が横たわっていた。それは人間のような形をしていたが、それを人間の遺体と言うにはあまりにも異様な姿をした遺体であった。

「あらどんでもこらっでげべな。してこらまでこてねばね」

遺体を見たゴンノシヨウはそれだけ言って家の中へ戻って行った。

「何だって？」

ゴンタは父親にゴンノシヨウが何と言っていたのか聞いた。

「こんなもんさはすぐに元に戻しとくつちや。さもねえとやつらがやって来るでえな。とかそんな感じだべ」

ゴンタは頷いたものの父と伴にしばらくその異様な遺体を眺めていた。

2・東京都千代田区、薄汚いアパートの一室

男は平日の昼間にもかかわらず薄汚いソファに座って携帯ゲーム機をいじっていた。そんなもので遊ばなくても部屋にはいくつものパソコンが置いてあるのだが、それらは何か他の目的のために動いているようだった。一日中勝手に動くパソコンと、それらに囲まれて携帯ゲーム機をいじる生活は、はたから見れば何も起きていないのと同じことだった。そして、彼自身もこれが何も起きない生活であると思っていた。しかし、次の瞬間、彼に大きな変化が訪れることになった。

勝手に動いているパソコンの中の一つが警告音を鳴らし、何かをダウンロードしていることを示す画面を表示した。男はソファから飛び起きて、そのパソコンの画面にへばりついた。

「スゴイよ！ ヤバイよ！」

男は見た目から想像するよりも高い声で興奮して声を出していた。そして男はメモリーカードを取り出すとパソコンに接続して、ダウンロードされるファイルを片っ端からメモリーカードにコピーしていった。

男が不正にそのファイルを手にしたことは、静かに世界に衝撃を与えていた。誰にも知られてはいけない機密事項が満載のファイルの流出によって、誰からも見えない場所で世界を動かしている人間達は「また面倒なことになった」と頭を抱えていた。

この出来事は彼らの緊急連絡網で世界中の担当者に伝えられ、そして最終確認の電話がウイスキーのニオイのたちこめる部屋にかかって来る。その部屋でウイスキーをラップ飲みする男は電話をとる度に「すでに手は打ってある」というのがそろそろ面倒になっていたが、とりあえず騒動が収まるまで「すでに手は打ってある」と言い続けなければいけないようだ。本当のところはまだ手は打っていないが。

3 モオルダアのポロアパート

何かへんだ。すぐへんだ。モオルダアはそう思いながらユラユラする視界を何とか固定出来ないかと頭を左右に振ってみたり、両手でこめかみの辺りを押さえてみたりした。それでも何かかへんですごくへんな気分は変わらなかった。

彼のポロアパートのドアをノックする音を聞いてモオルダアは立ち上がったが、ふらついて一度床に軽く手をつかなければちゃんと立ち上がれなかった。もたついているモオルダアを急かすようにドアをノックする音は次第に強くなっていった。

このけたたましいノックの音にモオルダアはイライラしながらふらつく体を何とか動かしてドアを開けた。そこにいたのはローンガマンの三人だった。彼らはモオルダアの許可も得ずに無言で部屋に入ってくると、モオルダアの部屋の窓から外の様子をうかがっておかしなところがないか、誰かに尾行されていないかをチェックしているようだった。

「なんだキミ達は？ 今日調子が悪いからヘンな話は聞けないよ。それにこれまでどおりに、用がある時にはこっちから行くから急に出てこられても困るだけだね」

モオルダアはだるそうな目を三人に向けながら力無くソファに腰掛けてコップに注いであった水を飲んだ。

「時にはこっちの都合で登場したって良いじゃないですか」

そう言ったのは元部長だった。

「アンタの力じゃ手に入らないような重要な機密書類を手に入れるヤツが世の中にいるってことだぜ」

モオルダアのことを「アンタ」と呼ぶのはフロシキ君以外にはいない。ヌリカベ君は相変わらず滅多に喋らない。

「機密書類は機密なんだからそう簡単には手に入らないよ」

体調のすぐれないモオルダアは当たり前のことを言っただけで誤魔化そうとしていた。

「ところが、IT社会におけるあるセキュリティホールを利用すれば元防衛庁の機密書類がダウンロード出来たりするんですよ」

やる気のなかったモオルダアはこの元部長の発言に目を輝かせながら顔を上げた。

「誰がそんなことをしたんだ？」

解りやすく話に食い付いたのを見て元部長が嬉しそうなことに気付いたモオルダアはちよつと悔しかったが、そこは気にしてもしかたのないことだ。

「その男は神皮シシカウというハンドルネームを使ってMyIDというSNSをやっていたんです。その日記でスゴイ！ ヤバイ！ という感じの内容を書いた後に事の重大さに気付いて退会してみたみたいです。退会する前にボクのところにもメッセージを送ってきたんですが、それによると彼はあなたに会いたがっているみたいです。まだ生きていればの話ですが」

ただ頷いていたモオルダアだったが「SNSって何？」ということは聞かすにはいらなかった。元部長はその辺を説明するのは面倒だったので「メルトモ」と言っただけで誤魔化した。

4 夜の児童公園

夜の児童公園でふらついているあやしい男はモオルダアである。彼は児童公園の入り口の方に誰かがやって来た気配を感じてさらにあやしくふらついた。そして後からやって来た男がモオルダアに近づいてくると、二人は並んでふらついていた。ベンチに座って話すより歩き回っていた方が自然で目立たないと思っっているようだが、狭い児童公園でそれをやるのは怪しすぎる。

「これはスゴイヤバイものですよ！」

シンカワは興奮しながらも声をひそめて話し始めた。

「U F Oに関する情報が満載なんです。ロズウエルから A K B も何でも！」

「どうしてそんなファイルにアクセス出来たんだ？」

モオルダアもつられて声をひそめていた。

「アクセスしたワケじゃないですよ。ボクがウイルス作成ツールで作ったウイルスにちょっとした細工をして、それをウィヌーというファイル共有ソフトでばらまいたんです。本当だったら流出した機密書類は大量にばらまかれるところだったんですが、ボクは悪意があつてウイルスを仕掛けたのではなくて、情報収集のためにやってたんでファイルはボクのパソコンだけに送られてくるようになっていましたけどね」

「つまり、どこかの誰かが機密書類の保存されたパソコンでそのウィヌーというファイル共有ソフトを使っていた、ということか？ そのゆるい感覚の人がホントに機密書類なんか持っていると思うの？」

モオルダアはめずらしく疑り深くなっている。しかし、シンカワは真剣に話を続けた。

「今はそういう時代なんです。緊張感がないんです」

「それはそうと、ウイルスをばらまいたとしたら、どんな目的であれキミは罰せられると思うんだけど…」

「だからファイルをコピーしたらすぐに逃げて来たんですよ。こんなもので捕まったら恥ずかしいですからね。日記のコメントで指摘されて良かったですよ」

シンカワはポケットからメモリーカードを取り出してモオルダアの手に握らせた。

「ここに政府が隠してきたことの全て記録されています。これを公表してください。真実をみんなに知らせるのです！」
そう言ってシンカワはモオルダアから離れようとしたが、モオルダアには途中からなんの話か良く解っていなかった。それから、さらに気になることがあった。

「あと、一つ聞きたいんだけど。メルトモって何？」
シンカワは一度立ち止まってモオルダアに疑問だらけの表情を向けたが、また振り返って児童公園を去っていった。と
いうか、メルトモも知らないのか？ モオルダアは。

5 翌朝、エフ・ビー・エル・ペケファイル課の部屋

スケアリーがペケファイルの部屋の扉を開けると、ドンヨリとしたモオルダアとドンヨリとした異臭が彼女を不快にさせた。

「ちよいと！ いったい何なんですの？」

「何っていつてもね、スゴイものが手に入ったんだよ」

モオルダアは口の中が麻痺したみたいなの喋り方で答えたが、スケアリーにはそんなことはどうでも良かった。彼女は辺りを見回してから、いろんなところへ顔を近づけてニオイの出所を探していた。そして最後にモオルダアのそばまで来て、ニオイの元がモオルダアであることを確信した。

「あなたもしかして酔っ払ってるんじゃないよ？」

「まさか。酒なんか飲んでる場合じゃないしね。すごい物が手に入ったんだから」

そうはいつてもモオルダアは酔っ払いみたいなの喋り方だし、あきらかに酒臭いのだ。まだ何か言いたそうなスケアリーよりも先にモオルダアはパソコンを操作して昨晚シンカワからもらったメモリカードの中身を開いた。

「ボクらが探し求めていた真実が今ここに！ AKB計画の全貌があきらかになっちゃうよ！」

モオルダアは急にニヤニヤし始めた。これはあきらかに酔っ払いのようだが、スケアリーはとりあえずモニタに何が表示されるのかを見守ることにした。

サイズの大きなファイルを開く時のちよつとした間が空いた後に、問題のファイルが表示された。

「ここに、彼らの隠している全てのことが…」

本当はそこに「彼ら」の陰謀に関する全てが書かれているはずだった。しかしモニタに表示されたのはモオルダアの予想とはまったく違ったものだった。

「何なんですの？ これ」

スケアリーは半分あきれてモオルダアに冷たい視線を送った。表示されていたのは、まるで意味をなさないひらがなの羅列に見えた。「うなべいかまてなこつたらほしだばこねるてごなればおつそれなかねとらねたべもせてれこも…」モオルダアはそのひらがなの羅列から何とか意味を見いだそうと真剣になって画面を見つめたが、そうしていると次第に視界が揺らぎはじめて、喉の奥から生臭い唾液が出てくるのを感じた。これは嘔吐の予兆であることは解っていたが、そうなる理由がないのでモオルダアは生臭い唾液をただ飲み込んだ。

「なんだよこれ！ 全然意味がないよ！」

しかし、吐きそうなのは変わらない。威勢良く叫んだつもりもモオルダアだったが最後の方には胃からこみ上げてくるものが彼の言葉を詰まらせていた。モオルダアは机の下にゴミ箱を見付けて、それに顔を埋めるとその中に嘔吐した。

「オエエエ〜」

スケアリーは驚いてはいたが、心配して良いのか怒ったらいのか解らない様子だった。

「ちよいと、モオルダア！ あなたホントに酔っ払ってるんじゃないでしょうね？」

「酔っ払ってなんかいないよ。でも最近ずつとこんな感じなんだよね。飲んでないのに、毎日ひどい二日酔いみたいな。そんな事よりも、あいつらは何なんだ？ ボクを馬鹿にするにもほどがあるよ！」

モオルダアはゴミ箱を抱えたまま声を荒げてみたが、その怒りは長いこと続かずにすぐ力無く椅子に座った。座った後もまだモオルダアの口から何か出てきそうな感じで、モオルダアは胸から上をたまに痙攣させていた。スケアリーはそんなところをあまり見たくなかったので、モオルダアごと椅子を少し遠くに押しやってから、パソコンのモニタを見えた。そこに書かれていることに彼女は何か心当たりがないでもなさそうだった。

「あたくし、聞いたことがあるんですけども、戦時中に日本軍が日本中の方言を集めて組み合わせたものを暗号として使おうという計画があったそうですよ。でも結局作った人達の中でも解読出来ない人が多くなってしまって、その無駄の多い計画はなくなったって事ですけれど」

「そんな事はどうでもいいんだよ。あいつらの遊びに付き合わされただけだよ。そしてボクは、まだ気持ち悪くて、また吐きそうだからトイレに行つて来ます」

モオルダアは自分の吐き出したものが入っているゴミ箱を抱えたまま部屋を出ていった。

スケアリーは少し心配そうにモオルダアの背中を見ていたが、再びパソコンのモニタに集中した。そこには確かに「でんがな」とか「まんがな」という良く知ったフレーズも書かれていた。

なぜか酩酊状態のモオルダアはトイレの中でひとしきり胃の中のを吐き出してから、洗面台に頭をつっこんで頭から水をかぶってみた。それでもまだモオルダアは真っ直ぐ歩くことも出来ないほどに酩酊状態だった。

「いったい、どうしたんだ？」

顔を上げたモオルダアは鏡に映る自分に問いかけてみた。モオルダアの目の下にはクッキリとしたクマができていた。トイレを出たモオルダアは、どこへ向かっているのかすら解らない状態だったが、おそらくペケファイルの部屋があるであろう方向へと進んでいった。そんなモオルダアを呼び止めたのはスキヤナー副長官のいつものあの台詞だった。

「おいモオルダア！ 何やってるんだ！」

モオルダアは驚いて振り向いたのだが、振り向いた時に頭を大きくゆらしてしまったので酩酊状態の彼の視界はさらにぐらついてしまった。

「副長官ですか？ 何をやっているもなにも、もうやばいっす」

「やばいっす、とか言うな！ それよりも、なにやら機密の書類がどうこうと騒いでいるという噂だが、どういう事だね？」

そう言われたモオルダアの半分潰れた目はスキヤナーの方を向いてはいたが、歪んでしまって絶えず揺れ動いているモオルダアの視界ではスキヤナーを認識出来ない。モオルダアは何とか目の前にいるスキヤナーの姿をクッキリと目に映そうと努力していたのだが、そうしているうちにまた気持ちが悪くなってくる。

もしかすると、もっと前からモオルダアの胃はその危険信号を脳に送っていたのかも知れない。或いは脳がまともに機能していないから胃が予期せずに異常な動作をしたのかも知れない。いずれにしても、モオルダアが「あれ？」と思った時にはスキヤナーの上着はモオルダアの吐き出したもので汚れていたのだ。スキヤナーの上着から汚いものがポタポタと床に落ちていた。

「おいモオルダア！ 何をやっているんだ！」

スキヤナーのこの言葉には敏感に反応してしまうモオルダアは一瞬だけ我に返った。そして、今日は早く帰って休むべきだということに気付いて、スキヤナーには何も言わずに振り返るとそのまま帰ってしまった。

スキヤナーはまったくワケが解らずに、汚された自分の上着をどうしようか考えていた。

6 翌日、モオルダアの実家

モオルダアの父は呼び鈴の音を聞いて胸騒ぎがした。彼の乙女的第六感が何かを彼に伝えていたのだった。モオルダアの少女的第六感とは少し違うが父の乙女的第六感も時々彼を救ってきた。以前の彼は国の機関で働いていたのだ。おそらくはモオルダアのようなになぜか上手くいつてしまっているんな仕事をこなしてきたのかも知れない。そして乙女的第六感によっていくつかの危機も乗り越えたに違いない。

それから長い年月が経った。もう乙女的第六感などが必要のない生活が長く続いていたが、この玄関で呼び鈴を押した人物が何か悪い知らせを告げにきたことがモオルダアの父には解っていた。彼が玄関の扉を開けるとそこにはウイスキーをラッパ飲みする男が静かに微笑んでいた。

「やあ、久しぶりだな」

ウイスキーを飲む男が言うのを聞いて、モオルダアの父は悪い予感が的中したと確信した。

「なんの用だ？」

「キミに知らせることがあるんだよモオルダア」

どうでもいいことだが、モオルダアは苗字なので父親もモオルダアである。そして、ウイスキーを飲む男とモオルダアの父には何らかのつながりがあるようだ。

ウイスキーを飲む男は例の極秘ファイルが流出したことをモオルダアの父に伝えた。モオルダアの父は自分が引退するまでにしてきた全ての仕事の水の泡となるようなその話に怒りを感じ、そして一方では恐れていた。

「あのファイルは絶対に秘密という意味において極秘だったはずだ」

モオルダアの父は良く解らない言い方で聞いたのだした。

「そのはずだったんだがね。我々だって職員が機密書類をノートパソコンで家に持ち帰って、さらにそのパソコンで趣味のファイル共有ソフトを使う時代が来るとは思ってもいなかったんだよ」

ウイスキーを飲む男が言うことは言い訳じみていた。しかし、静かに冷静に話す彼の姿は、いつものように妙な威圧感を相手に与えるものだった。

「そのファイルを息子を持っているというのは本当なのか？」

モオルダアの父が確かめると、ウイスキーを飲む男は頷いてそれがファイルを盗んだ犯人の供述だと言うことを伝えた。きっとシンカワは捕まって酷い目に合ったのかも知れないが、それを気にするのはやめておこう。

「あのファイルには私の名前も書かれてあるんだぞ」

それがモオルダアの父が恐れている事であるようだ。ウイスキーを飲む男は静かにウイスキーを一口ラッパ飲みしてから答えた。

「心配することはない。あの暗号は誰にも解読出来ない。それに解読する前にこちらで手を打つ」

「それは、まさか息子に手出しするということではないだろうな？」

モオルダアの父は彼らのやり方は良く知っている。彼らなら秘密を守るためにモオルダアを暗殺するぐらいのことは平気であるかも知れないのだ。ウイスキーを飲む男はまた一口飲んでから静かに答えた。

「安心したまえ。モオルダアに手を出そうとすれば、いろんなミラクルが起こってこちらが危険になるかも知れない、ということはキミにも良く解っていることだろう？」

モオルダアの父は「それもそうだ」と一安心したが、それでも漠然とした不安が彼の心を曇らせていた。そして、一度足を洗ったはずなのに、また面倒なことになってきた、と頭を抱えていた。

7 モオルダアのボロアパート

勢いよく扉を開ける音と、それと伴に聞こえてきたスケアリーの怒りに満ちた声に、ソファで寝ていたモオルダアは慌てて体を起こした。

「ちよいとモオルダア！ どういう事ですか？」

驚いて起きあがったモオルダアがまた気持ち悪そうに口を押さえていたので、スケアリーは少しまずいと思ったが、モオルダアは何とか持ちこたえたとコップに注いである水を飲んでスケアリーの方へと向き直った。

「どういうこと、と言われても良く解らないよ。永遠に飲みすぎで気持ち悪い飲み過ぎ地獄みたいだよ」

飲み過ぎ地獄って何なんですか？ とスケアリーは思ったが、どう見てもつらそうなモオルダアに彼女は少し心配になつてきた。

「あたくしは昨日のあなたの行動について上層部の人たちにさざん問いつめられたんですのよ！」

上層部の人たちって誰だろう？ とモオルダアは思っていたが、シーズン2からはエフ・ビー・エルにたくさんの職員がいることになっているので、その中の偉い人だろうと考えた。

「それで、どうしたんだ？」

「どうしたも何もありませんわよ！ あなたが勤務中に泥酔しているという事で、もしかするとあなたはクビですよ！ しかもあたくしの監督不行届ということになったらあたくしまで同罪ということですよ」

モオルダアはスケアリーの言う「監督不行届」というのがどうしても気になってしまった。スケアリーはモオルダアを監視する人だったのか？

「キミって、もしかしてボクを監視するためにボクのパートナーとして仕事をしてるのか？」

「そんなことはどうでもいいんですよ！ その辺は作者がちゃんと設定しておかないから、いざこうやって本物のパロディをやるうとした時にややこしい事になるんですよ！」

モオルダアはスケアリーが何を言っているのか解らなかったが、私はスイマセンと思っていた。スケアリーは先を続けた。

「それよりも、あのファイルですけど、あなたが入手したことを誰か知っているんですの？」

「そんなことはないと思うけどね。ファイルの受け渡しは完璧に自然な感じで行われたからね。あの男は自然に機密文書をやりとりする才能があるね。ただし、最後のボクの質問には答えてくれなかったけど」

モオルダアはまだ「メルトモ」がどういう意味なのか気になっているようだが、そんな事はどうでもいい。（というか、なぜか「ファイル共有ソフト」のことは知ってたりするのだが。）

「上層部の人たちはあたくしにあのファイルのことも色々聞いてきたんですのよ。あたくしはもしかするとアレは本当に重要なファイルなんじゃないか？ と思って機転を効かせて上手いこと誤魔化しておいたんですけど。あのファイルは本当に重要なものなんですか？ あんな物のためにあたくしがクビになったら、あなたはどうしてくれるんですの？」

モオルダアは自分が気持ち悪くて苦しんでいるのに自分のことばかり心配しているスケアリーに少し腹が立ってきた。

「そんなことは知らないけどね。もしもアレが暗号だというなら解読出来る人間を捜したら良いんだよ！」

モオルダアは少し興奮して声を荒げたが、そのとたんにまた気持ちが悪くなって口に手を当てて黙ってしまった。スケアリーはモオルダアの吐き出す汚いものが自分にかからないか心配で一步下がってからモオルダアを見つめていたが、モオルダアは持ちこたえたようだった。

「あれの解読なら、出来そうな人に会うことになっていますわよ。それよりも、本当に良いんですの？ アレは本当に

重要なものなんですの？　ヘタをしたらあたくし達はクビになるんですよ」

モオルダアは少しの間黙って考えたあとに口を開いた。

「ボクらが重要なことに近づくと、いつもの謎の男がやって来てちよつとしたヒントを与えてくれるはずなだけどね。あのファイルが重要なものかどうか解るのにはもうちよつと待ってみる必要がありそうなんだよね」

モオルダアは真剣に言ったつもりだったがスケアリーには何のことだか解らなかつた。スケアリーは「どうでもいいですわ！」と言ってモオルダアの部屋を出ていった。

8 日本方言研究所

日本方言研究所というのをスケアリーがどこで見付けたのか知らないが、彼女はモオルダアが入手したファイルの一部をプリントアウトしてこの日本方言研究所にいる女性の研究員に分析してもらっていた。その研究員がじっくりファイルを見ている間、スケアリーは何もすることがなく研究員の方をボーッと見つめながら「紅茶ぐらい出てこないのかしら？」と思っていた。

しばらくして、研究員は顔を上げてスケアリーの方に目を向けた。スケアリーはこの時研究員と目があつて退屈でいらついていたことを悟られたのではないかと思ひ、慌てて笑顔を作っていた。

「どうやらこれは古い時代の言葉のようです。ほとんどワガらないですが、イグつかはワガりました」

この研究員がワザとこういう喋り方なのか、それとも元からこうなのか気になりかけていたが、そこは気にしないように話に集中した。

「ワガる部分にはどんな事が書いてあるんですの？」

やっぱり気になっていたスケアリーはつられて同じように喋ってしまった。

「イグつかの単語が繰り返し現れるのです。一つは『物』とか『商品』を意味する言葉です。そしてもう一つは『お皿』です」

「お皿ですって？」

まさか備品の管理を機密文書にするわけではないのだが、スケアリーはその書類にはそんな備品に関する事が書いてあるのではないかと思つてしまった。

「もしかすると、これを全部読める人を紹介出来るかも知れません。山の中に住んでいるので連絡が付くかどうかワカリませんが」

「あら、それは良かったわ。もしも連絡がとれたらあたくしのところに知らせてもらえますかしら」
そう言ってスケアリーは研究員に名刺を渡した。受け取った研究員はさらに付け加えた。

「ホリへという方ならいつでも連絡がとれたんですけど。このあいだ勤務先の研究施設で遺体で発見されたんですって。恐ろしい話です」

「まあ、恐ろしいですわね」

そう言いながら、スケアリーはなぜこの話が妙になるのか考えていた。実は、そのホリへという男はシーズン2の三話目に登場している。緊急事態になってモオルダアとスケアリーはホリへの遺体を放置して逃げ出したのだが、スケアリーはその遺体がホリへだったとはまだ気付いていない。

9 モオルダアのボロアパート

酒も飲んでいないのにずっと飲み過ぎみたいに気持ち悪いモオルダアは、それを我慢して何かを待っていた。そろそろ来るはずだ。謎の男がちよつとした手掛かりとか、情報とかを持ってきてそれで話が進展するに違いない。モオルダアはそう考えて待っていた。外はもうかなり前から暗くなっている。すると、モオルダアの部屋の電話が鳴り始めた。モオルダアはやつときたか！ と思って受話器を取った。

「もしもし私だ」

聞き覚えがあるような、ないような声にモオルダアはそれが誰だか解らなかった。

「どちら様でしょうか？」

「オックス、私だよ。私だ」

(念のために書いておくと「モオルダア」は苗字で「オックス」が名前である。)

「私って言われてもねえ…。アッ！ 解った！ 最近流行りのワタシワタシ詐欺だな！」

「何を言っているんだ。おまえの父親だオックス」

「ああ、お父さん？ そう言われるとそんな気がするけど。それだったら名前を言わないと解らないじゃないか」

「そうはいっても、私には名前がないんだ。おそらく作者の怠惰のためだと思うがな。そんなことよりも、今すぐにあって話がしたいんだ。うちまで来てくれ」

「そんなこと言っても…」

モオルダアはそろそろ来そうな謎の男に会う前に家を離れたくなかった。

「早く来ないと、私はやけ酒を飲んでいいるから、大事な話をする前に酔いつぶれて寝てしまうぞー!」

「大事な話って?」

「どうでもいいから早く来るんだ!」

最後のほうがキレ気味だったのは自分に名前がないことに腹が立ってきたからかも知れないが、それはどうでもいい。一方的に電話を切られてしまったのでモオルダアは仕方なく実家へ向かうことにした。

それからしばらく経った後、誰かがモオルダアの部屋の鍵を開けて中に入ってきた。

「モオルダア? まだ気分が悪いんですの?」

灯りの消えた部屋に入ってきたのはスケアリーだった。

「例のファイルについて色々と解った事があったのよ」

しばらくして暗闇に目の慣れてきたスケアリーはそこにモオルダアがいないということを確認した。あれだけ具合が悪そうだったモオルダアがどこへ行ったのか気になったスケアリーはどこかに彼の行方の手掛かりがないかと辺りを物色しはじめた。

特に何も見付けることがないまま彼女が窓際まで来た時のことだった。ガラスの割れる激しい音と伴にスケアリーは額に激痛を感じて床に倒れ込んだ。

アパートのすぐ前でタイヤをきしませて急発進する自動車の音がなぜか遙か彼方から聞こえてくるようだった。突然の出来事にしばらく放心状態で目の前に散らばるガラスの破片を見つめていたスケアリーは、まだ何が起きたのか解らないまま起きあがった。

彼女の額には小さな傷がついていた。起きあがって二、三度まばたきをした後やっとその痛みを感じて一度額にあてた指先を見ると、そこにはうっすらと血が付いていた。

「いったい何なんですか?」

そう言う彼女の視線の先にはガラスの破片にまじってモデルガンの弾に使うBB弾が転がっていた。

10 モオルダアの実家

モオルダアが玄関の呼び鈴を押すと、ウイスキーの入ったグラスを持ったモオルダアの父がフラフラしながら出てきた。父はモオルダアの姿を見るなり彼を抱き寄せた。しかし、そのすぐ後に二人とも両者を押しやるようにして離れるとほぼ同時に言った。

「酒クサッ！」

自分が酒臭い事は解っても、どうしてモオルダアまでが酒臭いのか気になっていたモオルダアの父だが、それよりも先に彼に話しておくべき事があるのだ。彼はモオルダアを連れて奥の部屋へと向かった。

奥の部屋で向かい合わせに座った二人は伴にうなだれていた。気持ち悪いのを我慢してここまでやって来たモオルダアは衰弱しきっているようだし、情報漏洩の事実を知った父はあれからずっとやけ酒を飲みっぱなしで、もう限界に近づいているという感じだった。

モオルダアの父は飲み過ぎで上手く考えがまとまらないながらも、息子に伝えなければならぬことをちゃんと伝えようとゆっくりと慎重に話し始めた。

「もっと単純明快な話になるはずだったんだ。最初の設定さえ上手くいってれば」「設定って？」

モオルダアは父が何か重要な事を話そうとしていると感じていたが、まだ何のことだか理解出来ずにいる。

「お前はかなり設定されているよ、オックス。私や私の知らないお前の兄よりもな」

「何のことだかわかんないけど」
何を言っているのか良く解らない父の言うことを理解しようとしているうちにモオルダアはだんだん気持ち悪いのがひどくなってきた。

「何も解らないまま書き始められたお前の兄や、今回いきなり登場することになった私に比べたら、お前は設定されすぎているんだよ、オックス。お前がここに書かれることによって被った災難と言えば、話の途中で苗字が変わった事ぐらいだろう？ それに引き替え、私達はなんだ？ 私の知らないお前の兄は行方不明にされて、私に関しては名前さえ

決められていないんだ」

どうやらモオルダアの父は私を責めているようだが、ここでそんな話をされても困る。彼の話はまだ続く。

「お前は、兄とは違って手探りで書かれているワケではない。常に何かを知っているように描かれていて、しかも大抵はそれが正しかったりするんだ。最初はそんな感じではなかったのにな」

「何を言ってるのか解らないけど。それってお父さんが防衛庁にいた頃の話？」

「いざれお前もそれを知るだろう。作者の致命的ミスによって後から付け足されたその言葉を」

気持ち悪いのを我慢しているモオルダアはこんなに遠回しじゃないと説明出来ないのかなあ？　と思いつつ聞いていた。

「その言葉って？」

飲み過ぎでモオルダア同様に気持ち悪くなっているモオルダアの父もだんだん聞かれたことに対する反応が鈍くなっている。モオルダアが聞いてから少しの間をおいてやっと絞り出すように答えた。

「商品のことだよ」

それを聞いても何のことだかまったく解らないモオルダアはいろんな疑問を父親に投げかけようとしたのだが、それよりも前にモオルダアの父は限界に達してしまったようで「気持ち悪いから」と言ってトイレに向かっていった。

モオルダアは気持ち悪いのを我慢して父の言わんとしていたことを考えようとしていたが、考えれば考えるほど頭の中がグルグルしてきて、今にも吐きそうな状況になってきた。モオルダアは目をつむって座っていたソファに体を埋めた。

眠ればなんとかなると思っても気持ち悪くて目をつむっていられないし、目を開けても視界がユラユラして気持ち悪い。モオルダアはこういった感じで、吐くほど飲んだ人にしか解らないあの酷い状況に陥ってしまった。そんな中、モオルダアはトイレの扉に何かがぶつかって大きな音を立てるのを聞いた。

「ちよつと、お父さん？　大丈夫なの？」

モオルダア自身が全然大丈夫でなかったが、モオルダアはふらつきながらトイレの方へと向かっていった。

11 スケアリーの高級アパートメント

スケアリーはプリプリしながら鏡に自分の顔を映している。「せっかくのきれいなお顔が台無しですわ！」そう思いながらおでこの真ん中に出来た小豆ほどの大きさのアザの上に絆創膏を貼った。しばらく絆創膏の貼られた自分の顔を眺めていたが、何か納得がいかなかったのか、それを剥がしてからまた鏡の中の自分の顔を見つめた。そして、また剥がした絆創膏をおでこに貼った。そしてまたしばらく自分の顔を見ていたが、彼女がまた絆創膏を剥がす前に電話が鳴った。電話はモオルダアからだった。

「ちよいとモオルダア！ どうなってるんですの？」

スケアリーはどうしてモオルダアの部屋に行つてモデルガンで撃たれたのかということをもオルダアから聞きたかったようだが、モオルダアはそれどころではない様子である。

「スケアリー。大変な事になったんだよ」

そのあまりにも力のない話し方にスケアリーは何か悪いことが起きているような気がした。

「父が急性アルコール中毒で救急車で運ばれたんだ。それからボクは気持ち悪すぎて耐えられないよ」

スケアリーは聞いているうちにモオルダアに対する怒りがこみ上げてくるのを必死にこらえていた。

「急性アルコール中毒って、やっぱりあなたは酒を飲んで酔っ払っていたんじゃないやしませんの？」

「そうじゃないんだ。ボクは飲んでないよ。でもボクが来た時から父はそうとう酔っ払っていたから、それでボクに良く解らない話をはじめて作者がどうのこうのって…オエッ」

「ちよいと、大丈夫なんですか？ あなたがそこにいてお父様が急性アルコール中毒で運ばれたということは、とっても良くないことなんですよ！」

「なんで？」

「なんでじゃありませんわよ！ 上の人たちはあなたが勤務中にお酒を飲んでるんじゃないかって疑っているんですよ。仕事にも来ないで、そんなところでお酒を飲んでいたとか思われたらどうするんですの？」

しばらくモオルダアからの返事はなかった。何かもの考えようと集中すると気持ち悪くなってしまいうらしい。

「ちよいと、モオルダア？」

「ああ、もうダメ…。ボクは家に帰るから何かクスリを持ってきてくれないか？ これが治まるならなんでもいいんだ。キミは無免許だけど医者だからどうすれば良いか知ってるでしょ？」

「あなたの部屋は良くないですわよ。さつきあたくしはあなたの部屋で狙撃されたんですよ。それであなたの部屋の窓ガラスが割れていてすごく寒いからよした方が良いですわね」

「…。じゃあキミのうちに行く。…もう気持ち悪いから切るよ」

「ちよいとモオルダア!？」

スケアリーは吐きまくるモオルダアを自分の部屋に入れるのは嫌だったが、どうやらモオルダアはさうとう重傷なようなのでスケアリーは仕方なく彼を待つことにした。

しばらくしてモオルダアはやって来た。スケアリーがドアを開けると、足下のおぼつかないモオルダアは部屋に入ろうとしたのだが、上手く足が動かずにスケアリーの方へと倒れ込んで来た。スケアリーは慌ててモオルダアの体を押さえたが、モオルダア自身がコントロール出来ない体は重力にまかせてスケアリーにのしかかってくる。

このままではモオルダアに押し倒されてしまう。そうなたらこの変態モオルダアは自分に何をするのか? と思ってスケアリーは必死にモオルダアの体を支えた。

「そうはさせませんわよ!」

そう言うときスケアリーは押し倒されないように全身の力を込めてモオルダアを押さえていた。その時によく自分が倒れそうになっていることに気付いたモオルダアは後ろの方に重心をずらして普通に立てる状態に戻った。

一安心したスケアリーはモオルダアから放たれる猛烈な酒のニオイを感じた。

「いったいどうしたというんですの? これは医者じゃなくても解りますわ! あなたは飲み過ぎのせいで気持ち悪いんですよ」

モオルダアは話を理解しているのかどうか解らないようなうつろな目をしていたが、絶対に酒なんか飲んでないと何度も言っていた。

「そんなことはどうでもいいですわ。酔っ払いと話をしたって埒があきませんから」

そう言うときスケアリーはふらつくモオルダアを寢室に連れて行きベッドに寝かせようとしたのだが、少し考えてからベッドではなくてベットの横の床に寝かせた。それからモオルダアがいつ吐いても大丈夫のように洗面器をとりに行った。

どこに寝かされても関係ないぐらいに、或いは自分が立っているのか寝ているのかも解らないぐらいにモオルダアの

意識は朦朧としていたのだが、一度上半身を起こすとスクエアリーに向かって言った。

「ねえ、今回ってなんの捜査してるんだっけ？」

洗面器を持って戻ってきたスクエアリーも自分たちが何をしているのか忘れかけていることに気付いたが、彼女が返事を
する前にモオルダアはすでにヘンなイビキをかいて寝ていた。

「あなたがヘンなファイルなんか見付けてくるからいけないんですわ！」

スクエアリーは寝ているモオルダアに向かってつぶやくと、洗面器を彼のかたわらに放り投げた。

12 翌日

モオルダアが目覚めるといつもとは違う天井が彼の目に入ってきた。ほとんど機能しない脳で自分がどこにいるのか
考えてみたモオルダアだったが、何も思い出せなかった。しかし、どこかで見たことのあるこの部屋はおそらくスクエア
リーの部屋だということはなんとなく思い出していた。しかし、自分がなぜスクエアリーの部屋のベッドの横に寝ている
のか、まったく思い出せなかった。外の明るさからすると、もう昼を過ぎていているようだった。

モオルダアは起きあがって隣の部屋にいるかも知れないスクエアリーを呼んでみようかと思ったのだが、それよりも先
にモオルダアの内臓が異常な動きをはじめた。モオルダアは口を押さえ胃からこみ上げてくる物を押さえようとした
のだが、すでに彼の吐き出した物は指の間をすり抜けてスクエアリーのベッドに滴っていた。モオルダアは辺りを見回し
て彼の足下にある洗面器を見付けるとその中に残りの物を勢いよく吐き出した。

一晩眠ったぐらいではモオルダアの酩酊状態は治らなかつたようだ。それよりも大変なことになった。モオルダアは
まだ気持ちが悪かったのだが、そんなことも忘れてちり紙を見付けて、それでスクエアリーのベッドの上の吐瀉物をふき
取ろうとした。必死にこらえたためそれほど量の量ではなかつたのだが、真っ白いカバーに解りやすいシミが付いている。

「これはヤバイよ」

モオルダアはスクエアリーがこのシミを見付けて激怒する様子を思い浮かべた。それはかなりヤバイ光景に違いなかつた
のだ。モオルダアはそっと部屋の扉を開けて隣の部屋にスクエアリーがいるかどうか確かめてみた。どうやらスクエアリー
はどこかへ出かけているようだった。

モオルダアはそのことを確認するとフラフラと玄関の方へ歩いていきスクエアリーの高級アパートメントから逃げ出す

ことにした。

それからしばらく後、スケアリーの部屋の扉の鍵をガチャガチャと開ける音がしてスケアリーが入ってきた。

「もう、嫌になってしまいますわ！ モオルダアが飲んでなかった事を証明するなんて、どうやってすればいいというの？ どう考えてもアレは酔っ払いじゃありませんか」

一人でブツブツもんくを言いながら部屋に入ってきたスケアリーはとりあえずモオルダアの様子を確かめようと寝室の扉を開けた。彼女の目にはベッドの上のシミと、その横にある洗面器になみなみと注がれた汚い物だった。そして、そこから発せられる腐敗臭にも似たニオイが彼女の鼻をついた。

「モオルダア！ モオルダアアアア！」

彼女はモオルダアがもうすでにどこかへ行って部屋にはいないことが解っていたが、彼の名を叫ぶと玄関の外へと飛び出して、スゴイ勢いで扉を閉めた。

ヤバイ事になりそうな気配である。

13 モオルダアのボロアパート

車をスツ飛ばしてモオルダアの部屋までやって来たスケアリーはドアを蹴破るかのような勢いで開けてモオルダアの名を呼んだ。しかし部屋には誰もいなかった。

「いったいどこへ逃げたんですの？」

スケアリーはモオルダアの行きそうな場所を考えてみたが、それよりもいい考えがあった。どこに行つたとしても吐きまくってるモオルダアは嫌がられるに違いないですから、ここで待っていればいずれ戻ってきますわ！ という事らしい。

スケアリーは少し落ち着いてモオルダアの部屋の中を見渡していた。昨日の銃撃によって割れたガラスはそのまま床に散らばっていた。傾きかけた太陽の光がそのガラスの破片に反射して部屋の中を照らす様子はこの部屋を廃墟のように見せていた。そんな中でスケアリーはこの部屋に不自然な点があることに気付いた。

「モオルダアはいったいどこでお酒を飲んでいたのかしら？」

この部屋のどこを見ても泥酔するほど酒を飲んだ痕跡は見つからなかったのだ。酒はおろか、食べる物すらなさそうな荒涼とした後景だ。

スケアリーは冷蔵庫を見付けると恐る恐る開けてみた。こういう部屋にある冷蔵庫の中はどんな状況になっているのか知れたものではない。場合によっては未知の生命体が生まれているのではないかと。と思えるくらいにおぞましい状況になっていることもある。しかし、スケアリーの予想に反して冷蔵庫には飲みかけのドクターペッパーが一本入っているだけだった。

「おかしいですわ…」

スケアリーは他にあやしいところがないか部屋の中をくまなく探して回ったが、モオルダアがここで大量の酒を飲んだような証拠は見つからなかった。するとその時スケアリーは窓の外にあやしいワンボックスカーが止まっているのを見つけた。割れたガラス窓からそとそのワンボックスの方を覗くと、ボロアパートの出入り口から出てきた作業員が何か部品のような物をワンボックスに積み込んでそれが済むとワンボックスは走り去って行った。

その光景がどこか不自然であったことが気になるスケアリーは部屋を出てアパートの出入り口まで来てみた。そこに来るときっきの作業員はアパートから出てきたのではなく、アパートの敷地の裏側から建物の脇を通って来たことが予測出来た。おそらく作業員の持っていた物から垂れたと思われる水滴の跡がアパートの裏側から点線になって道路の方へ続いていたのだ。スケアリーはその跡をたどってアパートの裏側まで来た。水滴の跡は水道管のメーターがある穴のフタのところできれていた。穴を塞ぐフタはあきらかに最近開けられたようで、普段は周囲の土に埋もれかけているはずのそのフタはきれいにその形をあらわにしていた。

スケアリーはしゃがんでそのフタを開けてみた。するとメーターとそこからアパートの方へと続く水道管の間に彼女がこれまでに見たことのない真新しい何かの装置が取り付けられていた。

「おかしいですわ…」

スケアリーはさらなる謎に直面したのだが、モオルダアへの怒りだけは忘れないようにと心がけていた。

その頃モオルダアは行くあてもなくフラフラしながら街を歩き回っていた。しかし、汚い服装と、彼から発せられるニオイのせいですれ違う人はみんな変な目でモオルダアを見ていた。さらにある女子高生の集団は、すれ違った後に彼女たちがモオルダアから遠ざかって安全な距離まで離れたところで大爆笑していた。どうやら外にいるのは良くないよ

うだ。そこでモオルダアは仕方なく自分の家に帰ることにした。

フラフラと歩きながらモオルダアが自分のボロアパートについた時にはもうすでに日が暮れていた。モオルダアが外から自分の部屋の方を見ると割れたガラス窓が目に入ってきた。「そういえばスケアリーが狙撃がどうのこうのと言っていたような気がするなあ」ということを思っただけでなくモオルダアは腹が立ってきた。それはガラスを割った何者かへの怒りなのか、それともモオルダアを酩酊状態にしている得体の知れない何かへの怒りなのかは知らなかったがモオルダアは異様に腹が立ってしかたがなかった。

実体のない何かへの怒りを抑えるようにモオルダアは鼻から大きく息を吐き出してアパートの出入り口へと向かった。するとその時、アパートの裏側へと入っていく人影がモオルダアの視界の隅に映った。この時間にアパートの裏側へ行くものなどいはずだということをモオルダアは良く解っていた。となると、そんな怪しい人物は放っておくわけには行かない。モオルダアは急いで反対側からアパートの裏側へと回り込んだ。

アパートの塀に沿って進んだモオルダアは建物の側面の壁から裏側を覗き込んでみた。するとそこにはアパートの内部への侵入口を探しているクライチ君の姿があった。彼の手には銃が握られている。モオルダアはクライチ君に気付かれないように慌てて覗き込んでいた頭を引っ込めた。

建物の壁に背中を付けて聞き耳をたてていたモオルダアにはクライチ君が次第に彼の方へと近づいてくるのが解った。そして足音が彼のすぐ近くまで来た時にモオルダアは飛び出してクライチ君につかみかかった。

「おい、クライチ！ これはどういう事なんだ！」

モオルダアにつかみかかれたクライチ君は不意をつかれたこともあって、上手く体を制御出来ないモオルダアに押されるままに塀に体をぶつけた。そして、その衝撃で持っていた銃を落としていた。

酔っ払い状態のモオルダアはこの状況に一気に興奮を高めていた。それと同時に、ここ数日の気持ち悪い日々が全部クライチ君のせいだと決めつけていた。モオルダアは勢いにまかせてクライチ君の顔面にパンチを二三発くらわせた。

その時、モオルダアの部屋にいたスケアリーは外でモオルダアの声がするのを聞いて急いで彼の部屋を出た。

外ではモオルダアのパンチを食らった後のクライチ君がなんとか反撃しようとモオルダアともみ合っていた。始めは勢いのあったモオルダアだったが、酔っ払い状態ではなかなか勢いは持続しない。クライチ君の反撃のパンチをよけようとしたモオルダアはバランスを崩して尻餅をついた。ここで形勢逆転かと思いきや、モオルダアの手の下には幸か不

幸かクライチ君が落とした銃があった。モオルダアはそれを拾い上げるとクライチ君の顔の前に突きつけた。

「残念だったなクライチ！ こんなモデルガンなんか持つてくるからいけないんだよ」

クライチ君は顔面蒼白になって両手を上げると抵抗する気のないところをモオルダアに見せていた。

「それは：モデルガンじゃないよ。本物の：」

「何言ってるんだよ！ 人の家の窓ガラスを割るのに本物の銃なんか必要ないだろ！」

モオルダアは自分同様にクライチ君がモデルガンを持ち歩いているのだから、彼が今握っているのは本物の銃である。そこへスケアリーがやってきて、この危機的状況を目にした。彼女は驚いて、なんとかしなければいけないと思ひ自分の銃を取り出してモオルダアに向けた。

「ちよいとモオルダア！ 何をやっているんですの。人の部屋で吐いた後に人殺しまでするって言うんですの？ そんなことをしたらクビどころじゃないことはあなたも解っているでしょ？」

モオルダアは一瞬スケアリーの方を見てからまたクライチ君を睨みつけた。そしてその状態のままスケアリーに言った。「スケアリー。こいつが全部悪いんだ。こいつがボクの家窓ガラスを割って、そしてキミのおでこにヘンなアザを作ったんだよ。だからお返しにこいつの額にもBB弾をくらわしてやるんだよ！ キミと同じヘンなアザをつけてやる！」銃を持っているモオルダアだけがそれが本物だと気付いていない。スケアリーにはその質感からそれが本物であると解っていた。

「モオルダア！ それが本物の銃だって解っているの？」

スケアリーはモオルダアに向けた銃の引き金をいつでも引けるように身構えた。クライチ君は怪しい人物ではあるが、ここで間違つてモオルダアがクライチ君を殺すような事があるては、まさしくクビどころではなくなってしまう。

「うるさい！ もう気持ち悪いのとか、酔っ払い扱いとか嫌なんだよ！」

モオルダアが半分叫ぶようにそう言った後に夜の住宅街に銃声がこだました。その直後に倒れたのはモオルダアだった。クライチ君はモオルダアが倒れたのを見て「ヒヤ〜」という悲鳴をあげながら逃げていった。スケアリーはその後は追わずに倒れているモオルダアのところへ走り寄った。スケアリーの放った弾丸はモオルダアの肩を撃ち抜いていた。モオルダアは何が起きたのか解らないまま倒れていたが、彼の顔を覗き込むスケアリーを見て絞り出すような声で言った。

「うっ、撃ったね…。オヤジにも撃たれたことないのにい！」

その後、モオルダアは氣を失った。

14 土井仲村

モオルダアが目覚めるといつもとは違う天井が彼の目に入ってきた。これって前にもあったような気がするけど、と
思っていたが今回は少し違っていた。モオルダアの知らない老人の顔が彼の前に現れたのだ。

「起きたぎゃ」

老人が言うと、スケアリーがその横にやって来た。

「モオルダア？ あたくしですよ。おわかり？」

そういいながらスケアリーはコップに注いだ水をモオルダアに渡した。

「きつとひどい二日酔い状態のはずですわ」

モオルダアはまだ夢の中にいるようなハッキリしない意識の中でコップを受け取ると、これまでに起きたことを思い出そうとしていた。

「犯人はボクなのか？」

モオルダアがワケの解らないことを言うのでスケアリーは何も言い返せなかった。それを見てモオルダアが先を続けた。

「ボクが犯人だからキミはボクを撃ったんだ。だから犯人はボクなんだ」

さらに意味が解らなくなってきたが、今回の話に関しては「犯人」という感じのものは存在しない。

「モオルダア。あなたはもう少してクライチ君を撃ち殺すところだったんですよ。ですからあたくしが射撃の腕前を披露してあなたを救ったんですの。あたくしのおかげであなたは殺人犯にならずに済んだのですから、あなたはあたくしに感謝するべきですわ」

何が起きたのか必死になって思い出そうとしているモオルダアだが断片的な記憶ばかりしか思い出せない。おそらくクライチ君と揉み合っていたことすら覚えていないだろう。モオルダアは自分の記憶の欠如に不安な気持ちになつていった。スケアリーはそんなモオルダアを見て少し気の毒な気がしていた。

「モオルダア。あなたのお父様の事ですけど。残念ながら今回で降板ということですよ」

モオルダアはさらにワケが解らなくなってきた。

「降板ってどういう事？」

「本来ならば暗殺される予定だったのが、いきなり登場してきて、しかも名前も決まっていないうあなたのお父様が暗殺されるのは悲しすぎるという作者の配慮で、降板ということですよ。きっとどこかで隠居生活を送るはずですよ」
良く解らないのでモオルダアは理解しようとすらしていなかった。それよりも、モオルダアは自分がなぜ撃たれてここに寝ているのかを知りたかった。

「キミはたしかボクの家にいたよね？」

それを聞いてスケアリーはこれまでの騒動で忘れていた自分の家の寝室のおぞましい状況を思い出してしまった。スケアリーはモオルダアに怒りをぶちまけるために彼のアパート向かったのだった。あの寝室はスケアリーがそこを飛び出してからずっとそのままの状態なのだ。彼女が家に帰ればまたシミの付いた布団と汚い物が入った洗面器を見ることになる。スケアリーはこみ上げてくる怒りにまかせて、力無く横たわるモオルダアをグーで殴った。「アエ！？」というヘンな悲鳴をあげたモオルダアは驚いてスケアリーを見つめていた。

「なんで殴るんだ？」

涙目で聞くモオルダアだったが、スケアリーはもう気が済んだようでそれには答えずに話を変えた。

「あたくしの鋭い洞察力によって、あなたの酒臭い原因が解りましたのよ。あなたのアパートの給水栓につながる水道管にこんなものが装着されていたんですのよ」

スケアリーはモオルダアのアパートの裏で見付けた妙な装置を手にとってモオルダアに見せた。

「なんだそれ？」

「これでああなたの家につながる水道管の水に何かの化学物質を混ぜていたんですのよ。おそらく無味無臭のアルコールのようなものですわね。つまりあなたの部屋の蛇口をひねるとお酒が出てきていたんですのよ。あなたの最近の状態から考えると、とっても質の悪いお酒ということですよ。でも、これでああなたが自らの意志でお酒を飲んでいたのではないことが証明出来るかも知れませんわ」

モオルダアはなんだかヒドイ話だと思っていたが、そろそろ部屋の隅からチラチラこちらを見ている老人が気になりだしていた。モオルダアは少し小さい声でスケアリーに聞いた。

「あの人、誰？」

その声は聞き耳をたてていた老人にも聞こえたらしく、老人は静かにモオルダアの寝ているところまでやって来た。

「この方はナバホ・ゴンノシヨウ翁ですよ。ゴンノシヨウ翁はあのファイルを解読してくれたんですの。アレはやっぱり暗号で、ゴンノシヨウ翁は戦時中に暗号の作成に携わっていたんですのよ」

モオルダアは「ファイルってなんだっけ？」と思っていた。なにしろファイルを手に入れた時から泥酔状態だったのだから、言われてもすぐには思い出せない。しかし、しばらく考えると、極秘ファイルを入手したことや、それが読めなくて腹を立てていたことを思い出してきた。それと同時に今回は柄にもなく怒鳴っていたりしていたことも思い出してきて少し恥ずかしくなってきた。

ゴンノシヨウはそろそろ良いかな？ という感じで話し始めた。

「よか獵師ばこれ、獲物をあやめず動きば止めんだ。こんあねさ、えれえ獵師だっちゃ。生きたままがうみゃーでよければ、獵師はわんざでいかすでごわすじゃ」

これを聞いてモオルダアはやっぱりまだ自分が正常でないのではないかと心配になった。スケアリーは不自然な笑みを浮かべて「そうですわね」と答えていた。

「キミはゴンノシヨウさんがなんて言ったのか解ったの？」

モオルダアが不思議そうに聞いた。

「全部は解りませんが、雰囲気解りますでしょ」

「イヤ、解らないよ！」

モオルダアがだいぶ混乱しているようなのでゴンノシヨウが間にはいった。

「まあ、すこしはわかりやすく話せんこともねえだがや」

今のはモオルダアにもだいたい解った。

「ゴンノシヨウ翁の家系は代々訛りのひどい方達ばかりが嫁いできたりして、誰にもワガらないナバホ家独自の方言が出来たってことですわよ」

モオルダアはそれを聞いて思い出すことがあった。確か、以前にも似たような人が登場した気がする。それよりもモオルダアは別のことが気になっていた。

「ねえキミ今、ワガらない、って言わなかった？」

「言いませんわよ！」

そういつてスケアリーはモオルダアを睨んだ。睨まれたら最後、これ以上は聞くことができない。

「そんなことよりも、ゴンノシヨウ翁はずっと前からあなたが来ることを知っていたそうよ」

「先週だったかの、のすくらだむずれたっちゃ！」

モオルダアは何を言っているのか解らないゴンノシヨウを不思議そうに眺めていた。

「今のは、お告げがあった、という意味だと思えますわ」

スケアリーが言うと、モオルダアはどうして彼女がゴンノシヨウの言葉を理解出来るのかさらに不思議になった。モオルダアを見ているとなかなか調子が乗ってこないようなので、スケアリーはそろそろ重要なことを話すことにした。きつとそれでまたやる気が出て頭がハッキリしてくるに違いないのだ。

「例のファイルですけれど、40年代に国際的規模の隠ぺい工作があったということが書かれているそうですよ。なんでも、その証拠がゴンノシヨウ翁の家のすぐ近くの山の中にあるということですよ。ゴンノシヨウ翁はあなたをそこに案内してくれると言っていましたから行って見たらどうなんですか？ それじゃあ、あたくしは部屋のクリーニングがしたいから帰りますわね」

モオルダアは話を聞きながら少しずつ盛り上がっていたが、スケアリーがいきなり帰ると言い出したので拍子抜けしていた。モオルダアは撃たれた肩をかばいながらゆっくりと起きあがったが、その時にはもうすでにスケアリーは部屋を出ていた。

それにしても、スケアリーはゴンノシヨウの話をどこまで理解していたのだろうか？ ゴンノシヨウの話し方ではスケアリーが話していた隠ぺい工作の話もホントかどうか怪しくなってくる。モオルダアは中途半端な胸の高鳴りを抱えたまま辺りを見回していた。

「というか、ここはどこなんだ？」

ここにきてそこが気になりだしたモオルダアはやっと酔いから醒めたような気分だった。

15 那場保家

那場保家に向かう途中、モオルダアはゴンノシヨウから色々な話を聞いた。そして聞いていくうちに、注意して聞いていれば意外とゴンノシヨウの言うことも理解出来るということに気付いてきた。

「わたのところの親戚にやホリへっちゅうのがあって、あれもどえりやあ訛りでな。だけでも、仕事のあいだに事故に

あいよれば、そのままお亡くなりになりもしてよ。なんでもむごたらしいことだべからな。：ホリへの遺体を放置して逃げたようなヤツがいたらタダじゃおかねえよ！」

モオルダアはゴンノシヨウがいきなり普通の話し方をしたのに驚いた。そして、それはもしかすると彼がホリへの遺体を置き去りにして逃げたのをゴンノシヨウが知っていてワザとそうしたのではないかと思って、モオルダアはゾツとしてゴンノシヨウを見つめた。ゴンノシヨウはこれまでと同様に静かな表情でいた。たぶん安心して良いのだろう、とモオルダアは思った。ゴンノシヨウさんとホリへが親戚なのは偶然で、きっと最後に普通に喋ったのも偶然だろう。ゴンノシヨウが日本中の方言を使うとしても、その中には標準語に近いものだってあるのだろうから。

ゴンノシヨウはモオルダアが冷や汗をぬぐっているのにも気付かず、また静かに喋り出した。

「植物って土の中から顔をだす感じ？ それって秘密とかでも一緒に、真実はそのうち解っちゃうみたいな？」

モオルダアはさらに驚いてゴンノシヨウの顔をまじまじと見つめてしまった。

「それって、方言なんですか？」

「おらあのばっさまはコギャルだっちゃ！」

モオルダアは、自分がからかわれているのではないかと思っていた。こういう場合は信じたフリをして驚いたようにしていれば、きっとそのうちゴンノシヨウがニヤニヤし出すに違いないと思った。そして、そのようにしていた。

しかし、ゴンノシヨウはいつまでも表情を変えずに、さらに話し始めた。

「ちよつと前までは穴匙村^{アナサシ}ちゆう村があったでな。そいつがある日突然消えよったんだべ。村人がみんな殺されちまったんだとか言うもんもありますが、人間が跡形も残さず消えるこつたあたりまへんで」

「それはどういう事ですか？もしかして村人全員が異星人に連れ去られたとか、そういう話ですか？」

モオルダアは驚きと期待の入り交じった声で聞いたが、ゴンノシヨウは静かにクビを振った。

「穴匙村はな、隣の穴箸村^{アナハシ}と合併して穴箸町になったんだべな」

どうしてそんな話をするのか疑問に思っていたが、モオルダアはすぐく疲れた気分になった。そうこうしているうちに那場保家に到着した。

モオルダアはゴンノショウの孫ゴンタと伴に山の中へ向かった。始めはゴンタの自転車に二人乗りして移動していたのだが、山の中にはいると二人乗りでは自転車がこげないという事が解ったので、モオルダアは自転車から降りてゴンタは自転車を手で押して歩いて進むことになった。

歩いて移動する間、モオルダアはゴンタといくつか言葉を交わしたのだが、ゴンノショウのように難解な言葉を話すことはなかった。最近ではみんなテレビを見るから誰でも標準語で会話が出来ると、ゴンノショウが喋るような解りづらい言葉はゴンタにも理解出来ないということだ。それから、学校でヘンな言葉を喋るといじめられるからゴンタは一生懸命まともな日本語を勉強したというドロツとした話も出てきた。

しばらく木の生い茂った山道を歩いていると不自然にひらけた場所へ出てきた。そこは採石場の跡地で、山の斜面はきれいにえぐり取られていた。そこに来るとゴンタは下の方を指さして「アソコじゃ」と言って崖の下の方を指した。

ゴンタは石が切り出された後のほぼ直角に近い崖の中にわずかに出来た安全な場所を歩いて下に降りて行った。モオルダアもビビりながらゴンタの後についていった。ここが採石場だったのはそうとう昔だったのか、下の方へ近づくと浸食によって傾斜は次第に緩くなっていた。

まともに歩けるようになってくると、モオルダアのポケットの中で電話が鳴っていることにも気付くし、その電話に出ることも可能になる。モオルダアはこの山の中でよく電波が届くなあ、と思いながら電話に出た。

「やあモオルダア君」

いきなりそういわれても、モオルダアは誰と話しているのか解らなかった。

「どちら様ですか？」

「解らないのかね？ 私だよ」

「もしかして、あなたは私の父のフリをしていますね。でも残念ながら父は降板しましたからね。そんなことをしても無駄です。ワタシワタシ詐欺には引っ掛かりませんよ」

モオルダアは得意げに言っていたが電話の男は何のことだか良く解らなかった。

「どうでもいいのだが、キミはどこにいるんだね？」

「さあ。どこだとしても見渡す限り山だらけで銀行なんてありそうにないから、話すだけ無駄ですよ」

「銀行とは何のことだか解らないがね。キミに話したいことがあるんだが、二人だけで会えないかね」

「さあ、それはどうですかね。ボクは自分がどこにいるかも良く解ってないからね。それにワタシワタシ詐欺師と話す気なんかありませんよ」

二人の会話はあきらかに噛み合っていないのだが、電話の相手は用件を伝えるため先を続けた。

「キミのお父さんはキミに何かを話したと思うんだがね。それを鵜呑みにするのはどうかと思うんだよ」

モオルダアはここに来てやっと話している相手がワタシワタシ詐欺師ではないと気付いてきた。それにしてもワタシワタシ詐欺師ってなんだろう？

「何かってなんですか？」

「彼も計画に関わっていたんだよ。キミのお父さんも最終的には我々に同意したんだ、モオルダア君」

モオルダアは自分が誰と話しているのか考えていた。なぜかむこうはモオルダアのことをよく知っているような話し方をしているし、多分どこかであったことがある人に違いないのだ。モオルダアは考えながら彼が以前にスキヤナーのオフィスで見かけたウイスキーを飲む男ではないかと思った。声がなんとなく似ているし、言葉の間にすこし間が開くことがあるのはウイスキーを飲みながら話しているからだろう。そして、彼は極秘ファイルが流出したことを良く思っておらず、モオルダアがこれからすることを阻止しようとしているに違いない。

「あなたにとっては都合の悪いことかも知れないけど、ボクは陰謀を暴くからね」

「そんなことをすればキミのお父さんの悪事を暴くことにもなるんだぞ」

「父はもう降板してるからダイジョブですよ。それじゃあ」

モオルダアは電話を切ってゴンタの後を追った。

ゴンタが行く方を見るとそこには土に埋もれた大きな金属の物体が埋まっているようだった。土のえぐれたいくつかの場所からその金属の物体の一部が見えていたのだが、おそらくそれは地面の中では一つにつながっているに違いない。モオルダアはその金属が地表に見えている場所へ行ってみてそれが何なのか確かめてみた。どこかで見たようなその物体は貨物列車の貨車のようだった。モオルダアはゴンタに呼ばれてゴンタの方へ向かった。

「これは貨車かな？」

モオルダアが聞くと、ゴンタは「冷凍車だべ」と答えてかれの足下にある冷凍車の屋根についているハッチを開けて、促すような目でモオルダアを見た。モオルダアは少し恐かったが、ゴンタに怖がっている様子を見せるわけにはいかな

いので、開いたハッチから中へと降りた。

その頃、ウイスキー男を乗せたヘリコプターが猛スピードでモオルダア達のいる場所へと向かっていった。先ほどの携帯電話による会話で電波を探知して彼らの居所を知ったようだ。ウイスキー男はいつになく緊張した面もちでウイスキーをラッパ飲みしていた。

冷凍車の中に入ったモオルダアは次第に中の暗さに目が慣れていった。そして、モオルダアの前にゆっくりと恐ろしい後景があらわになっていった。モオルダアはへんな悲鳴をあげる寸前でなんとか息を飲み込んだ。それから携帯電話を取り出すとスケアリーに電話をかけた。

スケアリーはすでに出発して、鼻歌を歌いながら山道を車で走っていた。電話が鳴ると彼女はダッシュボードについているボタンの一つを押した。それによって運転中でも携帯電話を持たずに会話ができるようだ。

「スケアリー！ すごいことになったよ」

「いったいどうしたというんですの？ あたくし、早く帰らないとお部屋が臭くなってしまいそうで心配なんですのよ」
「山の中に埋められた冷凍車の中なんだけどね。なんか死体が山積みなんだよ。どうやら部屋の掃除どころじゃなさそうだよ」

「死体ですって？」

スケアリーは思わず車を止めて話に集中した。

「それはどういうことですか？」

「さあ、解らないよ」

スケアリーはカバンを開けてゴンノショウが解読したファイルを取り出した。

「それは気になりますわ。例のファイルには戦時中に行われていた実験のことが書いてあったのよ。その実験が米軍の管理下で戦後も密かに続けられていたんですの。なんとその実験というのは人体実験だったんですのよ。驚いてしまうでしょ？ でもファイルには人間ではなくて『商品』という言葉で書かれていますわ」

モオルダアは「商品」と言われてなぜか実家の風景を思い出した。それから酔っ払っていた父親の顔を思い出して、最後にやっと父が言っていた「商品」という言葉を思い出した。酔っ払いの記憶は面倒なものである。それよりも、モオ

ルダアはスケアリーに一つ言っていないことがあると思っていた。

「ここにあるのは人間の死体じゃないんだよ」

モオルダアは死体の一つに顔を近づけて自分が言っていることが間違いでないことを確かめていた。

冷凍車に放置されてたためか、白骨化せずに死体はミイラのような状態になっていた。骨格の作りは人間によく似ていたが、身長や手足の長さのバランスや頭蓋骨の形は人間や他の霊長類には見られないものだった。

「これは、おそらく河童だよ」

「ちよいと、モオルダア。本気で言ってるんですの？」

モオルダアはさらに死体を観察しながら「本気だよ」と答えた。それから、死体の頭部におかしな所があることに気付いた。

「これはヘンだぞ。いったい彼らは何をされたんだ？ この頭は……」

「なんなんですかの？」

「この頭の皿は陶器の皿だよ。益子焼きだ」

「お皿ですって？」

スケアリーはその言葉にまた何かを思い出したようにファイルを調べはじめた。しかし突然電話が切れてしまった。

「ちよいと、モオルダア！？ どういたしましたの？」

冷凍車の外にいたゴンタはヘリコプターの近づいてくる音に気付いて慌ててハッチを閉めたのだった。それによって携帯電話の電波が届かなくなりモオルダアの電話は切れた。ゴンタはハッチを閉めた後にどこかに隠れるべきだったが、それよりも早くヘリコプターはゴンタの頭上にまでやって来て、それは彼のすぐ近くに着陸した。

ゴンタが何も出来ずにその後景を見守っていると、ヘリコプターから迷彩服を着た数人の特殊部隊のような人たちが降りてきて冷凍車のハッチを再び開けた。そして特殊部隊みたいな人たちに特有のキビキビとした動きで中の安全を確認すると銃を構えて中へと入っていった。

特殊部隊のような人たちに続いてウィスキー男も急ぎ足でやって来て、彼はゴンタの腕を掴んで聞いた。

「キミはなんて名前だ？」

ゴンタは恐かったが、この人たちが悪い人のように思えたので何も言わずに黙ってウィスキー男を見つめていた。その

とき足下のハッチから特殊部隊のような人の一人が顔を出した。

「誰もいません！」

ウイスキー男はいつもの冷静さを失ってあからさまに苛立った様子である。

「モオルダアはどこにいるんだ？」

彼はゴンタにさらにきつい口調で聞いたがゴンタもモオルダアがいまいとはどういうことだ？　と思つて何も言えなかつた。

「なんでいないんだ？　彼はここにいるんだ！」

「誰もいないんです。何も残さず消えたんです」

ゴンタの代わりに特殊部隊のような人が答えた。

「人が跡形もなく消えるなんてことがあり得るか！」

ウイスキー男は特殊部隊のような人に向かつて怒鳴つたが、モオルダアがいまいというのならしかたがない。そして予定どおりに証拠を隠滅しないといけない。

「焼却するんだ！」

ウイスキー男は吐き捨てるように命令してからゴンタをヘリコプターへと連れて行つた。特殊部隊のような人たちは例によつて迅速に行動して冷凍車の中に発火装置のようなものを投げ入れた。そして、彼らが全員ヘリコプターに乗り込んで離陸した時、轟音と共に冷凍車の入り口から爆発するような勢いで炎が上がつた。モオルダアは見つからないまま冷凍車の入り口からは炎が吹き上がり続けていた。

to be continued...

シーズン・ツールの真実

これはthe Poke-Files : Season 2の「あとがき」であると同時に作者の言い訳コーナーにもなっていますのよ。シーズン2は色々と理解出来ない部分が沢山あったり、予定を変更して書かれたエピソードが沢山あったでございましょう？その辺を含めて作者様や関係者が偉そうに解説してくれるみたいですわよ。(スケアリー)

「シーズン2について」

制作総指揮 Little Mustapha へのインタビュー

——シーズンと表現されているのになぜか最終回までに一年以上ものあいだ続いていますか、なぜでしょうか？

いきなりそこを気にされると困るんだけどねえ。確かにシーズンなのに三年以上かかっているんだよねえ。シーズン1は良い具合にほぼ一年間だったのに。でも一シーズンを一年間にするよりも、10話で一シーズンというのが元々の考え方だから、それはそれで良いんだよ。

——つまり、あなたの計画通りにシーズン9までやるとするとあと18年以上はかかるということになりますけど。

マジで？ それはちょっと時間をかけすぎだなあ。まあ次からはなるべく一年以内に終わるようにしたいけどね。ここ数年は色々とスランプだったことはこのコーナーだけに限らないからね。でも逆に18年以上続いたとしたらちょっとした記録じゃない？

——それは、期間だけを考えるとそうなるかも知れませんが、年に一話とか二話しか書かない場合はそれでもないと思いますよ。

まあ、そうだね。というかキミは誰なんだ？ そんなことを言うと私がミドル・ムスタファと話をしている気分になっ

てしまうじゃないか。ここは音楽コーナーじゃないからミドル・ムスタファアみたいなツツコミはいらないんだよ。

—それならば無機質な感じで続けたいと思いますが、シーズン2の見どころ、というか読みどころはどんなところでしょうか？

それは難しいなあ。ストーリーの展開的にネタ切れっぽい部分を見付けていると楽しめるかもね。でもその代わりにこまかいネタは充実していると思うよ。それから、本格的なパロディーがやっとな出てくるよ。これはやろうかどうか迷ったんだけど、ペケファイルがXファイルのパロディを目標していることを忘れないためにもやってみただ。おかげで最終回はかなり本物に近いストーリーになってしまったよ。このままシーズン3の1話目も本物のストーリーを追いかけるのか？ とか思っていると思うけど、まあ要注意だね。

それから9話目のミュージカルが画期的だったよね。最初は脚本風にする予定だったんだけど、なんとなくこの辺から創作スランプから抜け出せるかな、という気もしてきて。アレはペケファイルの歴史に残るエピソードだね。

あとは、シーズン2には動物用の麻酔薬で眠らされたネコ科の猛獣と思われる謎の生き物とか、マタタビボールに反応するモンスターとか出てくるけどその辺にも注目だね。

—そうですか。ありがとうございました。

あれ？ もう終わりなの？ 無機質すぎるにもほどがあるんじゃないの？

「RIDDLE」 2055P

さすがに一年も間があくと話を続けるのが大変だよ。本来ならばシーズン2で行方不明になるのはスケアラーの方になるはずなんだけど、なぜかモオルダアが行方不明なのはペケファイルらしいかも知れないけど。でもそのおかげでシーズン1で書けなかった謎の男ドドメキとスケアラーが謎の組織と取り引きする場面とかも書けたんだけど。というか、これはさらに続く「SWINDLE」の方での話だっけ (Little Mustapha)

あたくしのシャワーシーンをカットするからペケファイルは人気がないんですよ！（スケアリー）

「SWINDLE」について

まさかシーズン1から数えて三話も話が続くとは思わなかったけど、気がついていたら長い話になってしまったよねえ。タイトルはちよつと凝っている感じだね。前の「RIDDLE」に合わせて韻を踏んだりするし、内容的にもピタリなタイトルかな。それと、アルコールによって気持ち悪くなる人の描写が詳しくなるのはなぜだろう？（Little Mustapha）

このエピソードによって二人の捜査官の間の絆が深まったという感じですね。（スケアリー）

ボクはこのエピソードのために本当に二日酔いになったんだよ。（モオルダア）

茶番です。（ヌリカベ君）

「リトル・ムスタファマン」について

この話はいつか問題になるだろう、と思っていたことの一つがあきらかになっていくんだよね。それはタイトルにボクの名前がついているということ。最初にこのペケファイルに登場したモルダー・ムスタファ捜査官は、後で失踪したことになるってしまって、一話目からはその弟のモオルダアが登場するんだけど。その兄が追っていたのがリトル・ムスタファだったんだよね。この話は本物のほうの「リトル・グリーンマン」という話のパロディになっているから、それに合わせてあるんだけど、今後この問題がどうなっていくのか楽しみだね。

それはそうと、この話には面白い偶然があって盛り上がってしまったんだ。このエピソードには河童というキーワードが何度か出てくるんだけど、よく考えたらボクの好きな「河童」という小説では、主人公は上高地の山の中を歩いている時にカッパの世界に迷い込んでしまうんだよね。始めは別の理由である観測所の場所を上高地にしたんだけど、なかなか良い場所の選択だったね。（Little Mustapha）

んだば、んだば言っても、なしておらあが死んでまわらないといかんのか？　ちゅうこったでな！（堀辺）

「マキシマム・ビューティー」について

シーズン2なんだからどうしてもスケアリーは失踪しなくちゃいけなかったんだ。そうしないとクライチ君も登場出来ないし。でもこのときに使ったネタは最終回のネタと一緒になんだよね。知らないうちに精神に異常をきたすような薬物を摂取しているというところがね。まあ、このころは最終回を本物のパロディにするとは決めてなかったし、言わなければバレないぐらいにはなってるからね。（Little Mustapha）

ボクがモオルダア捜査官よりも人気者になることはこのエピソードの時点から解っていたけどね。（クライチ君）

あたくしのことも忘れないでいて欲しいものですわ。（スケアリーの姉）

「GONE」 205P

これは別コーナーの「Black hole」との連動企画なんかにしなければシーズン2で一番面白い話になっていたかも知れないのにねえ。途中で Little Mustapha's Black hole のメンバーが名前をあかさずに登場してるし、Black hole の方を知っていても意味が解らなくなってしまふ部分が多かったかも知れないよ。

ちなみに、最後の方のモオルダアの口を使ってスケアリーが喋るって部分はステイブン・キングがパクたんだよ！マジで。少なくともボクはそう思ってるよ。（Little Mustapha）

ボクはオンラインサービスの会社を作って億万長者になるんだ！（ヨシオ）

「アパートメント」について

本当は最初に登場する「人間にまぎれて地球で生活する孤独な宇宙人」の話にしようかと思っていたんだけどね、それだどあの缶コーヒーのCMみたいだから、最終的にあんなったんだけど。面白い感じにはなったよね。管理人がジオリマで再現していたのは「病院坂の首くくりの家」(ホントは「くくり」の部分は難しい漢字を使います)の場面だよ。(Little Mustapha)

私が隠し持っていたのは児童ポルノなんかじゃないからな！ (管理人)

ページをめくるとエロースやスケーベを感じられるのが理想的なエロ本だね。そこに直接的な行為や露骨な描写は必要ないね。エロースやスケーベがあれば何が見えて何が見えてないかに関わらずそれは良いものなんだよ。(変態モオルダア)「というか、スケーベってなんだ？」

どうして男の人はいつもイヤラシイことばかり考えてるのでしょうか？ (203号室の美女)

「KIMOE」「隠れ家」について

この話ほどストーリーを大幅に変更したことはこれまでになかったよねえ。気がついてみたらシーズン2にはあまり政府が何かを隠蔽しているような話あまり出てこなかったから急ぎよ内容を変えてしまったんだ。それでも、こまかいネタや雰囲気は元のストーリーに合わせてしまったから、ちょっと不自然な感じもするよね。

元々の予定ではキモエが怪物に変身していた、というのがオチだったんだけどね。キモエの父親がインドネシアの辺りの小さな島で手に入れた魔力があるとされている禁断の顔料をキモエが使ったために、キモエが怪物に変身してしまうという感じだったんだ。そうすれば話はお屋敷を中心に進められるし、スケアリーをお屋敷に一人残して怖がらせることももっと簡単だったんだよね。まあ、最終的にはいい話っぽくなってしまったからこれでも良いけどね。(Little Mustapha)

幽霊とか怪奇現象というのは全部科学の力で証明して見せますわ！（スケアリー）

スケアリーさんはボクのことをどう思っているんだろう？（エフ・ビー・エルの技術者）

「歌と劇・プロフェシー」について

これは本当にペケファイルなのか？ という感じでエフ・ビー・エルの二人は何も出来ずに事件は解決、というよりも事件なんてほとんど起きていないヘンな話だね。実は「プリンプリン物語」みたいな雰囲気を目指して作られているんだよ。（Little Mustapha）

いつか必ずニコラス様に会うために日本に戻るわ！（アティラーノン姫）

クーデターの後には自由にタバコが吸えるようになってせいせいしておりますが。一か八かでやってみると上手くいくものでございますな。イヒイヒイヒイ…。（ばあや）「マジでー？」

ボクは全てを失ってしまったような気がするよ。（ニコラス刑事）

尻尾が迷路になっているイヌっていったい何なんだ？（モオルダア）

あのデパートは実在するデパート、というかホームセンターに近いんだけど、それをモデルにしてるんだよ。実在する方はちゃんときれいに掃除してあるけどね。時々、ほとんど知られていない歌手とかがイベントをやっていたり、出入り口の前にイヌが見つないであって飼い主は買い物中だったりするほのぼのとしたデパートなんだよね。話のアイディアもそこに買い物に行った時に思いついたんだ。（Little Mustapha）

「穴匙」について

あんき、こなぐだうましてしもれば、かつかどおながでえろうごとだっちゃ！（ゴンノシヨウ）

話の流れはほぼ本物の方に合わせてみたんだけど。そのためにDVDを見ながら書いていたら最初は台詞だらけになってしまったんだよね。テレビドラマというのは台詞を中心に話が進んでいくからね。その辺のバランスをとるのがちよつと大変だったかな。

それから話の流れは同じでもいろんな設定は本物とまったく違うから、それもあってこの最終回はいい意味でおバカな感じになったかな。ホントはこの話の前にクローン人間がモオルダアの兄と名乗って家に戻ってくる話を作るはずだったんだけど、気付いたら最終回だったし。そのためにモオルダアの父はいきなり現れて、いきなり降板になってしまったんだよ。

後はスケアリーがエイリアンに誘拐されてないというところも問題だね。一度行方不明にはなったけど、あの話からはエイリアンは想像出来ないし、これは困ったことになりそうだな。

ちなみにモオルダアの酩酊状態に関してだけど。あれは酔っ払って気持ち悪いというよりは食中毒の時の気持ち悪さが元になって書かれているかな。酔っ払うのも食中毒もボクは得意だからね。（Little Mustapha）

あたくし早くお部屋に戻ってクリーニングをしたいんですけど、あんな終わり方じゃ帰るに帰れませんわ！（スケアリー）

このエピソードのためにボクはわざわざ古くなった生ガキを食べておいたんだぜ。（モオルダア）

そんなこたあどうでもいいんだけどもよ。おいらも名前が決まってねえって、誰か気付いたべか？（ゴンノシヨウの息子。或いはゴンタの父）

音楽について

第9エピソードはミュージカル仕立てということで、曲が作られましたが、オカルトやエイリアン、SF等といったペケファイルの世界観をピアノ伴奏のMIDIで見事に再現した素晴らしい作品を作ることが出来ました。(作曲家、Little Mustapha)

「縦書きPDF版のみの特典コメント」

あの時に作った曲をピアノのみのMIDIだけにしておくのはもったいないと思っていただけ、縦書きPDF化に伴ってちゃんとした感じのリアレンジで公開される事になったよ。

正直なところ、最初に公開された時にはボク自身もかなりスランプだった感じもあったし、MIDIバージョンだけで精一杯だったかも知れないんだけど。でも作曲自体は楽しかったし、それなりのアレンジで再び公開できたのは良かったと思ってるよ。(作曲家、Little Mustapha)

SFXについて

ペケファイルは文字だけで構成されているのでシーズン2でもSFXはありません。(特殊効果担当：FX・ムスタファ)

最近、静止画からモーフィングムービーを作るソフトで遊んでるから、そのうち新しいオープニングムービーが出来るかもね。ちなみにシーズン2の途中からずっとオープニングムービーが見られなくなってるけど、新しいのを作るのをサボってるからなかなか見ることには出来ないね。(Little Mustapha)

シーズン・ツールの真実 Little Mustapha

シーズン2 縦書きバージョン、特別付録

シーズン2第5話「GONE」と連動企画として書かれたBlack-holicの変なシリーズです。どの位連動しているのか？という謎な部分が多いですが、「GONE」の彼らがどうやって消えていったのかとか、その辺のことが解るような、解らないような内容でもあります。

Black-holic #095 「ブログ脳の恐怖？」

みなさんこんばんわ！ あのビックリ健康番組¹がなくなって寂しい思いをしている方々のために、今日は特別に「あることないこと大百科！」です。

一般にはあまり知られていない牛乳の驚くべき効果が明らかになりました。オレンジジュースやレモンジュースなどと牛乳を混ぜると、何と妙な白い固まりが出来るのです！

実験を進めていくとさらなる真実が明らかになります。あの白い固まりを集めて食べたらフルーチェみたいな味がするのでは？ という仮定のもと白い固まりをスプーンですくって食べてみると、とてもまずかったです！

ミドル・ムスタファ——ちょっと、何やってるんですか？

Little Mustapha——あれ？ 何でキミがここにいるんだ？

ミドル・ムスタファ——最近この更新が極端に減っているから心配になってたんできてみたんですよ。そしたら案の定こんなことになってたんですね。

Little Mustapha——こんなことって何だよ！ 今日のはもの凄い真実が明らかになる「あることないこと大百科！」なんだから。邪魔しないでくれよ！

ミドル・ムスタファ——そんなことしてると、このBlack-holicも打ち切りになっちゃいますよ！ だいたい「妙な白い固まりが出来るのです！」っていうのは何なんですか？ そんなこと書いたって誰も興味を示しませんよ。やせたり、

¹ これを書いた当時話題だった、ねつ造が問題になって放送が終了したあの大事典的な番組のこと。

肩こりが治ったりよく眠れたりしないとダメなんですよ。

Little Mustapha——でも、あの白い固まりだけを食べてたらやせるだろ？

ミドル・ムスタファ——やせるというか、体調悪くなるんじゃないですか。それよりも、食事に出来るだけの白い固まりを作るのにどれだけの牛乳と酸っぱい飲み物が必要だか解ってますか？

Little Mustapha——まあ、そうとうな量だろうねえ。でもそれで業界が潤うならいいじゃないか。この企画はいずれちゃんとした番組にしてポッドキャストで大配信なんだぜ！

ミドル・ムスタファ——なんだぜ！ じゃなくて、こんなものを大配信しても誰も見てくれませんよ。それよりも、今日ここに来たのはあなたにちゃんとしたBlack holeをやってもらうためです。

Little Mustapha——それじゃあ、他のメンバーも呼んで「ものまね王様決定戦」をやろうか。新ネタがあるんだよ。「夕陽のガンマン」におけるクリント・イーストウッドの口の開き具合。これ、どう？

ミドル・ムスタファ——どう？ って。それはどこをどう「ものまね」してるのかゼンゼン解りませんよ！ そんなことはやりませんよ。だいたい、文字だけのコンテンツで「ものまね」ってあり得ませんよ！ 今日タイトルにあるとおり「ブログ脳の恐怖」について書いてもらいますよ。

Little Mustapha——なんだ。あのタイトルを付けたのはキミだったのか？ ボクは「あることないこと大百科！」やろうと思っただのに、なぜか今回のタイトルが決まっておかしいと思っただ。なんでそんなことしたんだ？

ミドル・ムスタファ——それは自分の心に聞いてみてください。

Little Mustapha——心？「…おい心くん。どうして今回のタイトルは『ブログ脳の恐怖』なんだ？」…「ソナナコト、オレニ聞クナヨ！」…。ボクの心は何も知らないみたいだぞ。

ミドル・ムスタファ——そんな一人芝居はどうでもいいんですよ。問題はあなたの脳が異常な状態にあるということですよ。あなたがあまりにもこのサイトのブログ「RestHouse」に力を入れているあまりに、あなたはいつの間にかブログにしか文章を書けなくなってしまうんです。あなたは完全なブログ脳です。

Little Mustapha——そんなことはないよ。あのブログを始めたあともちゃんとこっちを更新してたし、その他にもいろいろやってたじゃん！

ミドル・ムスタファ——でも、こっちの記事を書いている途中にブログの記事を書いたりして、結局こっちの記事がまともにならなくなったりしてませんか？ しかも、最近ではここの内容がRestHouseに影響されている気もするんです

よ。

Little Mustapha——そういわれると、そんな気もするなあ。

ミドル・ムスタファ——ということで、今回はあなたの脳のリハビリもかねて「ブログ脳の恐怖」を徹底検証してもらいます。

Little Mustapha——まあ、そういわれるとそうかもね。もともとRestHouseはここに書ききれないことを書く場所として作られたんだからね。しかも、最近ではこのBlack-holicに載せられるぐらいのネタを向こうに書いてしまうこともあるしねえ。…といってもこれから「徹底検証」するにはボクらは喋りすぎじゃないか？

ミドル・ムスタファ——それはあなたが余計なことをいろいろ言うからですよ！ じゃあ、今回はここでオシマイにしておきましょう。次回は徹底的に「ブログ脳」に関して検証していきますからね！

という感じで、ミドル・ムスタファが出てきてしまったので「妙な白い固まり」の正体は解らずじまいです。しかも「ブログ脳」っていったい何なんだ？ 気になるので次回のBlack-holicはミドル・ムスタファの希望どおり「ブログ脳の恐怖（徹底検証編）」になりそうです。（徹底検証出来なかった時にはでっち上げの内容になります。或いは打ち切りです。）お楽しみに！

Black-holic #096 「ブログ脳の恐怖（徹底検証編?）」

前回予期せずミドル・ムスタファがやって来て予定していた「あることないこと大百科！」ではなく「ブログ脳の恐怖」をやれ、と言ってきたので、今回は「ブログ脳の恐怖」の続きです。

それにしても「ブログ脳」って何なのでしょう？ ミドル・ムスタファによれば、それは「ブログにしか文章を書けない状態の脳」ということですが、私はちゃんとブログ以外にも文章を書いていきます。どうも怪しい感じです。ここはミドル・ムスタファに「ブログ脳」についてももっと詳しいことを聞かないといけないかも知れません。

ということでミドル・ムスタファにいろいろ聞こうと思ったのですが、さっきまでいたミドル・ムスタファが見あたりません。そのかわり、そこにはブログ脳がいました！

Little Mustapha——うわー！ なんだキミは！



「ブログ脳さん」

ブログ脳——初めまして。私がブログ脳です。食べてもいいよ。

Little Mustapha——食べるって、なにを？…というか食べないからいいよ。

ブログ脳——そうなの？ じゃあニオイ嗅いでみる？

Little Mustapha——それもやめとくよ。それにしてもキミは気持ち悪いなあ。ホントにキミがブログ脳なの？

ブログ脳——気持ち悪いとか言わないでくださいよ。私はあなたの今の状態そのままなのですから。つまり私はあなたのブログ脳なのです。食べてもいいよ！

Little Mustapha——食べないよ！ でもキミがホントにボクの脳みそなら、ボクの頭の中は空っぽということか？

ブログ脳——それは違います。あなたの頭からブログ脳が外に出て今のあなたの脳は正常な状態になっているのです。

Little Mustapha——正常といっても、この状況がすでに異常なだけけど。まあいいか。ブログ脳さんはブログ脳なんだから「ブログ脳の恐怖」についてはさうとう詳しいということだね？

ブログ脳——まあさうとも言えます。

Little Mustapha——それは良かった。「ブログ脳の恐怖」を徹底検証するまでもなく、ブログ脳さんが自分のことを

話せば今回の特集は大成功だ！

ブログ脳——それは無理ですね。私はブログ脳。徹底検証なんてできません。思いついたら何も考えずに書き込んで投稿してしまうブログ脳ですから。自分のことについてもよく考えたことがないので、自分のことは何も解っていないのです。食べてもいいよ！

Little Mustapha——食べない！…でも待てよ。キミは今「自分のことは解っていない」とか言いながらちゃんと自分のことを話してたじゃん。「何も考えずに投稿」ってやつ。それこそ「ブログ脳の恐怖」なんじゃないか。

ブログ脳——果たしてそれだけでしようか？

Little Mustapha——そこは否定するのか？ それじゃあ、他にどんな「恐怖」があるんだ？

ブログ脳——それは解りません。私、自分のことは何にも解っていませんから。それは正常な状態のあなたの脳みそで考えてください。食べても…

Little Mustapha——食べないよ！

それにしても、ややこしい話です。私の頭の中から出てきたいうブログ脳さんですが、何を話しているのか良く解りません。ここは私が「ブログ脳の恐怖」について考察していかなくてはいけないのでしょうか。

それから、ブログ脳さんはさっきから何かにつけて「食べてもいいよ」とか言っています。確かに、遠くから見ると食べられなくもないような形をしています。山盛りのウニのような気もしてきます。

そんなことよりも、ブログ脳について話を進めなくてははいけません。しかし、いったい何から考えていけばいいのか…。

ミドル・ムスタファ——何をブツブツ言ってるんですか？

Little Mustapha——あれ、いつの間に戻ってきたんだ？

ミドル・ムスタファ——いや、ちょっと用事を思い出して。それよりも「ブログ脳の恐怖」に関して何か解ったんですか？

Little Mustapha——ブログ脳さんと話していて一つだけ解ったことがあるんだ。

ミドル・ムスタファ——ブログ脳さんって誰ですか？

Little Mustapha——気付かなかったの？ ほらそこにいるのが…。あれ？ いなくなっちゃった。ブログ脳さんがいたら「ブログ脳の恐怖」に関して明確な答えが見つけれられると思ったのになあ。

ミドル・ムスタファ——そうなんですか。それで、「一つだけ解った」というのはどういうことなんですか？

Little Mustapha——何も考えずに記事を投稿してしまうということだよ。何も考えていないと無責任で意味不明な投稿がだらだらと続いてしまう可能性があるのでは？ という感じかな。問題はその手軽さにあるんだ。

ミドル・ムスタファ——まあ、それはあなたには当てはまりませんがね。でもまったく逆のケースもあり得ますよ。もし仮に長い間更新されなかったブログがあるとすると、そこが徐々に更新されたとします。そしてその記事が「長い間更新できなくてすいません」というものだとしたら、それはそれで「ブログ脳の恐怖」ですよ。

Little Mustapha——なんだか良く分かんないけど。

ミドル・ムスタファ——まあ、ここまででは解りづらいですが、さらにその後も長い間更新されなかったとして、その次の更新でも「長い間更新できなくてすいません」だとしたら。そして、それが永遠に繰り返されるとしたら。

Little Mustapha——ああ、そういうことか。確かにおかしい感じだなあ。そういうことだったらボクにもネタがあるぞ。

ミドル・ムスタファ——ネタじゃなくて真実をお願いしますよ。

Little Mustapha——ウソではないよ。これから言う事例はボクが実際にネットサーフィン中に見たものなんだから。

ミドル・ムスタファ——ネットサーフィンって、懐かしいですねえ。

Little Mustapha——まあ、そこは気にしない。それで、ボクの見たものというのはとある日記だったんだけど、その内容が「今日はブログを書きました」だったんだ。

ミドル・ムスタファ——うわあ、それは問題作ですねえ。ブログに日記を書くという行為自体が日記の内容になってしまっただけ、それをブログに書いているのだから、それは日記を書くという行為自体が日記になってしまっただけ。もうワケが解りませんよ。哲学的ときえ思える、恐怖のブログ脳ですねえ。

Little Mustapha——だんだん盛り上がってきたけど、「ブログ脳の恐怖」に関しての考えは全然まとまりそうにないなあ。ここは話を基本的なところに戻したらどうかかな。どうしてブログに日記を書くのか？ とか。

ミドル・ムスタファ——そうですね。なぜか多くの人がブログとは日記を書くためのものだと思っている感じはしますねえ。あつ、ちょっと失礼。

Little Mustapha—あれ、どこ行くの？

ミドル・ムスタファ—また用事を思い出してしまったので。すぐに戻りますから。

おかしい感じがです。ミドル・ムスタファがそんなに忙しいはずはないのですが。もしかするとたまたま忙しいのだけ
れど、私のブログ脳問題があまりにも深刻なために忙しいのにも関わらずここにやって来ているのかも知れません。だ
とすると大変なことです。何としてもこの「ブログ脳」の問題を解決しないといけません。

話は「どうしてブログに日記を書くのか？」というところまで進んでいました。これに関していくつかの理由が挙げ
られると思います。まず考えられるのがマスコミによるテキストなブログの説明です。「ブログとは誰でも簡単にネッ
ト上で日記を書けるシステム」みたいなことをいろんなところで聞いたたり読んだりしました。

確かに、特に設定を変えない限り記事は新しいものから順に表示されるので日記を書くのには適していますが、だか
らといって日記を書かなければいけないということではないのです。そもそも、日記というのは他人に大公開するた
めに書くものではないという気もするのですが…

ブログ脳—果たしてそうでしょうか？

Little Mustapha—うわ、なんだよ！ いつの間に戻ってたんだよ。というよりどこに行ってたんだ？

ブログ脳—いや、失礼しました。ちょっと面白いことを思いついてしまったんで、あなたの代わりにブログを更新し
てきました。

Little Mustapha—ブログって「RestHouse」のハナニ？

ブログ脳—そうですよ。

Little Mustapha—そうですよ、じゃないよ。勝手に書かれたら困るじゃないか。いったい何を書いたんだ？

ブログ脳—さあ…忘れてしまいました。ノリで投稿しちゃったから。でも心配はいりませんよ。私はあなたのブログ
脳ですから、あなたの思いつく以上のことは書けません。

Little Mustapha—そんなこと言っても、安心できないよ。

ブログ脳—でもそんなことはいつものことじゃないですか。

Little Mustapha—ん…？ まあ確かにそうかも知れないなあ。沢山更新した時とか、酔っ払って書いた時には次の

日に何を書いたかなんて覚えてないんだよねえ。

ブログ脳——でしょ？ 安心したでしょ？

Little Mustapha——安心はできないよ！ 何を書いたか覚えてない時は実際に書いた内容を確認するまですごく不安なんだから。これからは勝手に更新なんかしないでくれよ。

ブログ脳——それはできませんよ。あなたがいつもしていることですから。私はあなたの思ったとおり動くだけなんです。食べてもいいよ！

Little Mustapha——食べないとは思うけどね。それよりも、ブログ脳さんは「ボクのブログ脳」ということなの？

ブログ脳——そうですよ。最初から言ってるじゃないですか。

Little Mustapha——なんだ。じゃあブログ脳さんのことを詳しく知っても一般的な「ブログ脳の恐怖」については何も解らないということかな？

ブログ脳——そうじゃないですか？ 食べてもいいけどね！

Little Mustapha——何度言ったら解るんだ？ 食べないってさっきから言ってるじゃん！

ここで私はあることに気付きました。ここにいるのは私のブログ脳。ブログ脳さんが引き起こす問題は全て私に限ったことなのです。同時にブログをやっている全ての人それぞれにブログ脳さんが存在して、それぞれの「ブログ脳の恐怖」がある、ということなのかも知れません。

こうなってくると問題はもっと深刻なことになってしまいます。「ブログ脳の恐怖」に関してはっきりとした結論を出すには世界中のブログ脳さんを集めなくてはいけないのでしょうか？ そんな面倒なことはいけません。ここはとりあえず私のブログ脳さんと一緒に「ブログ脳の恐怖」に関する仮説でも立ててみましょう。

それから、さっきから「食べてもいいよ！」とか言ってるブログ脳さんを見ていたら、ちよつと美味しそうに見えてきました！ でもウニっぽくてもさすがに自分の脳みそは食べられません。

Little Mustapha——ところでブログ脳さん。ここで提案があるんだが、キミのノリだけの思考と今のボクの慎重な思考で世界中の「ブログ脳の恐怖」を……。あれ？ ブログ脳さん？！ またいなくなっちゃったよ。

ミドル・ムスタファ——どうしたんですか？ また一人でブツブツ喋ったりして。なんだかあなたの脳はそうとうプロ

グに侵されていますねえ。

Little Mustapha——いや、そういうことじゃないんだけどね。どうやらブログ脳さんはキミのことが嫌いみたいだ。

ミドル・ムスタファ——だから、そのブログ脳さんって何なんですか？…まあどうでもいいですよ。それよりも「ブログ脳の恐怖」について考えてくれましたか？

Little Mustapha——それなんだけどねえ、ブログ脳なんてものはすごいあいまいなものなのかも知れないよ。十人いれば十個のブログ脳があるんだから。

ミドル・ムスタファ——「百人いても一つの首」みたいなの？

Little Mustapha——…。それって「百人一首」のこと？全然違うけど。何でキミがそんなことを言うんだ？

ミドル・ムスタファ——いやあ、冗談ですよ。ところであんまり深刻になってもいけませんから、ここでちょっと休憩しませんか？ これ買ってきたんですよ。

Little Mustapha——それってお寿司？

ミドル・ムスタファ——そうなんです。そのスーパーによつたらウニだけですごく安くなってたんですよ。あなたのためにちゃんと日本酒も買ってきましたよ。やっぱり寿司には日本酒がいいと思って。

Little Mustapha——いやあ、ウニはちよつと…。

ミドル・ムスタファ——あれ？ ウニはダメなんですか？ 好き嫌いはないと思ってましたけど。

Little Mustapha——ホントは好きなんだけどねえ。今日はちよつと食べる気がしないんだよ。

ミドル・ムスタファ——変な感じですねえ。それじゃあ別のを買ってきますよ。残念だけどウニは返品ですね。ウニほどじゃなかったけど鉄火巻きも安かったからそつちと取り替えてもらいますよ。まさか鉄火巻きが食べられないなんていわないでしょうねえ。そんなこと言ったら日本中から大ひんしゆくですよ！

Little Mustapha——いやいや、そんなにサービス精神旺盛じゃなくても…。あらら、行っちゃった。

ブログ脳さんもミドル・ムスタファもいなくなってしまうた今、結局私一人で結論を出さなくてはいけないようだ。何を書いたのか覚えていないような私のブログ脳。それから、ブログ日記を書いたことがブログの記事になっているあのブログ脳。探せばまだまだ「ブログ脳の恐怖」は見つかるだろう。しかしブログという一つの仕組みから発生しているのだから、もしかすると問題の根元は一つだけなのかも知れない。

そんなことより、どうして誰も「ウェブログ」という呼び方を使わないのか、というところにも問題が…

ブログ脳——本当はウニが食べたかったんじゃないですか？

Little Mustapha——うわー！ なんだよ。せっかく誰もいなくなったから適当にまとめしまおうと思ってたのに。

ブログ脳——そうはいきませんよ。またブログを更新してましたけど、いつでも適当だからすぐに書き終えてしまうんですよ。それよりも、食べてもいいですよ！

Little Mustapha——もういい加減にしてくれよ！ 食べたくないよ。

ブログ脳——へえ、そうですか。それならいいんですけどね。それよりも、さっきはすごく面白いこと書いてやった。へくく。

Little Mustapha——面白いことって、まさかシモネタとかは書いてないだろうね？

ブログ脳——さあ、良く覚えてないですから。でも面白かったですよ。ニヤニヤしながら書いていましたよ。ウニの話だったかな？

Little Mustapha——キミまでウニかよ。そんなに言われると食べたくなってしまおうよ。

ブログ脳——やっぱり食べたいんじゃないですか。

Little Mustapha——ボクだってねえ、ブログ脳さんさえいなければ喜んで食べてたよ。キミがウニっぽいから、食欲をなくすんだよ。

ブログ脳——またそんなことを言って。見た目が同じでどうしてボクは食べずにウニは食べられるんですか？ それはおかしいことですよ。それこそブログ脳問題ですよ。

Little Mustapha——なんだそれは？ キミがそんな適当なことを言うからブログ脳問題が発生するんだよ。

ブログ脳——でも、それはそれで楽しいことですよ。それに私を食べたら良いネタになりますよ。「今日はとってもお腹が空いてたからブログ脳を食べちゃいました！」って書いたら、とっても面白いことになると思いますけどね。

Little Mustapha——まあ、それはそうだけど…。でもキミを食べてもまずいかもしれないし…。

ブログ脳——そんなことは食べてみないと解らないじゃないですか。まあ、結構自信はあるんですけどねえ。スーパーに売ってるウニなんかよりはゼンゼン美味しいですよ。

Little Mustapha——マジでっ。

ブログ脳——マジですよ。しかも私を食べたらすごく楽しい気分になるんだよ。食べてみる？

Little Mustapha——確かに、さっきウニを見てからちよっとお腹が空いてきているんだよね。

ブログ脳——食べちゃいましようよ。楽しいですよ。世の中には星の数ほどのブログがあって、星の数ほどのブログ脳がいるんです。それぞれがやりたいようにやって何が悪いというのですか？ あなたのブログ脳である私はあなたに食べてもらいたがっているのです。だからといってこれが何か問題になりますか？ 楽しいことは良いことでしょう？

Little Mustapha——それはそうだね。

ブログ脳——食べてもいいよ！

Little Mustapha——食べちゃおうかな？

ブログ脳——食べてもいいよ！

Little Mustapha——醤油とかいるのかな？

ブログ脳——このままでじゅうぶん！ うまみ成分が沢山つまっていますよ。

Little Mustapha——食べても良いかな？

ブログ脳——食べてもいいよ！

Little Mustapha——それじゃあ、ちよっとだけ…。

ブログ脳——ちよっとといわず、丸ごといっちゃって。

Little Mustapha——うわー、美味しいなあ。ブログ脳さんって、美味しいなあ。

ブログ脳——それに、楽しくなってきたでしょ？

Little Mustapha——すごく幸せな気分だあ…。全部食べちゃってもいいかなあ？

ブログ脳——どうぞ、どうぞ。遠慮せずに…。

結局「ブログ脳の恐怖」なんて存在しないのです。ブログ脳になったら食べてしまえば良いのです。楽しければそれでいい。適当でも関係ない。書いた内容を覚えていなくなっても。全ては誰かのためではなく、自分が満足するためにやっているのですから。

ミドル・ムスタファ——鉄火巻き売り切れでしたよ。仕方がないから明太子を買ってきましたけど…。どうしたんです

か？ ニヤニヤして。「ブログ脳の恐怖」に関して何か進展はありましたか？

Little Mustapha—もう、そんなことはどうでもいいんじゃない？

ミドル・ムスタファ—どうでもいいなんて、言わないでくださいよ。ここは特集コーナーなんだから、適当にやったらダメなんです。

Little Mustapha—でもブログ脳の恐怖なんてものはないんだよ。自分の好きなことを好きなように書いて、そこに問題なんて少しもないよ。食べても良いよ！

ミドル・ムスタファ—食べるって、何をですか？

Little Mustapha—カップ巻きなんかよりゼンゼン美味しいよ！

ミドル・ムスタファ—どうでも良いけど、ちゃんと「ブログ脳の恐怖」についてまとめてもらわないと、特集になりませんよ。さっき盛り上がった日記の話とかはどうなったんですか？

Little Mustapha—あんなことはもう忘れちゃったよ。ノリだけでやってたからね。食べても良いよ！

ミドル・ムスタファ—だから、食べるって何をですか？

Little Mustapha—ホントはウニが食べたかったんでしょ？ でもウニなんかよりボクの方がゼンゼン美味しいよ。食べてみる？

ミドル・ムスタファ—ちよつと、気持ち悪いですよ！

Little Mustapha—気持ち悪いなんて言うなよ。ボクはキミのブログ脳なんだよ。食べてみる？

ミドル・ムスタファ—意味が解りませんよ！

Little Mustapha—食べても良いよ！

ミドル・ムスタファ—？？？

Little Mustapha—食べても良いよ！

(【注意】フィクションです！)

みなさま、いかがお過ごしでしょうか。私は「イカしたドクターM」こと、Dr.ムスタファです。前回の「ブログ脳の恐怖（徹底検証編？）」を書いたあと、Little Mustaphaが行方不明になってしまったので、彼に代わってこのBlack-holicを一時的に担当することになりました。

行方が解らないのはLittle Mustaphaだけではなく前回彼と一緒にいたミドル・ムスタファも消息を絶っています。いったい彼らに何が起こったのか？ そんなことは専門家にまかせるとして、ここはせっかくこのBlack-holicを書く機会を与えてもらったので、今回の大特集は張り切っていきたいと思います。

まず、この特集コーナーのくせに少しも特集できていないコーナーで何を書くかというところですが、そこは科学者である私を書けば少しも問題はありません。私が長年の研究の末に見つけた様々な興味深いことの一部を書くだけで、ここはこれまでとはまったく違った、まさしく言葉どおりの「大特集コーナー」になるのですから。

それでは第一回目の大特集のタイトルはずばり「目指せ！ アフィリエイトで年収5,000円……」です。これまで沢山のアフィリエイトに関する書籍が発売されていると思うのですが、これほど現実的なものはありません。楽して儲けようとしても結局これぐらいしか儲けられません。

でも楽して五千円貰えたら、それは素晴らしいことです。それに税金の心配もありません。

それではまずどうやってアフィリエイトを始めるかについてです。これは簡単です。自分で「私は今日からアフィリエイト始めるぞ！」と宣言すれば良いのです。宣言したてまえやらざるをえなくなってきましたから、自分でいろいろ調べてアフィリエイトを始められるでしょう。それでダメならもうやる資格なしと…

ここでたまりかねた様子でニヒル・ムスタファが割り込んでくる。

ニヒル・ムスタファ——心配だから来てみたら、やっぱりひどいことになってるな。

Dr.ムスタファ——なんでキミが入ってくるんだ？ 今回は私の番だから好き放題書いたっていいじゃないか！

ニヒル・ムスタファ―そうは言っても、これだけひどい内容じゃあ黙っていられないのさ。

D: ムスタファ―そんなことを言っても「コウモリも鳥のうち」だぞ。

ニヒル・ムスタファ―???…。先生、それって意味が解って言ってるの？

D: ムスタファ―当たり前だ！

ニヒル・ムスタファ―どうでもいいか。だいたいこんなの読む人いないしな。

D: ムスタファ―そんなことはないぞ。私の科学的な視点でアフィリエイトを科学すれば…

ニヒル・ムスタファ―科学して五千円じゃ先生の科学は百年以上遅れてるぜ。

D: ムスタファ―うるさい！ 素人はこれだから困るんだ。全然ユニバーサルな感じでものを考えようとしな。

ニヒル・ムスタファ―ユニバーサルって言っても…。

D: ムスタファ―ユニバーサルな視点で考えると100万円も五千円も意味がないんだよ。

ニヒル・ムスタファ―なんだ、そんな意味でのユニバーサルかよ。つまり宇宙ではお金の価値なんかないということでしょ？ もっと難しい理論が出てくると思ったのに…。そんなことよりLittle Mustapha達の失踪に関してはどうなってるんだ？

D: ムスタファ―ああ、それなら心配いらんよ。警察にまかせてあるから。

ニヒル・ムスタファ―警察っていつても、こんな失踪事件を警察が捜査してくれるのか？ 失踪したくせにブログだけは更新してるんだぜ。

D: ムスタファ―そんなことは関係ないさね。我々は警察に強力なコネがあるのを忘れたのか？

ニヒル・ムスタファ―コネって。まさかニコラス刑事さんのこと？ それじゃあ望みは薄いな。でもそんなことはどうでもいいことなのさ。

D: ムスタファ―それじゃあ「ユニバーサルなアフィリエイト」を考察していこうじゃないか。

ニヒル・ムスタファ―それは、先生が「D: ムスタファのブラックホール」でやればいいのさ。ここはLittle Mustapha's Black holeなんだぜ。Little Mustaphaがくだらないことをやるぶんには許されてもおレ達がそんなことをやったらいけないのさ。ここはおレ達でLittle Mustaphaを見つけて、なんとかしないとイケないぜ。

D: ムスタファ―なんだキミは。そうやって義理堅い一面を見せたりして。今はこのサイトが科学的なサイトに生まれ変わるまたとない機会なんだぞ。

ニヒル・ムスタファ——先生が何を言ってもここは科学的にはならないぜ。それじゃあ、ここは間をとって科学的にLittle Mustaphaを探してみるの？

Dr.ムスタファ——まあ、それなら仕方ないな。じゃあ、科学的に「ユニバーサルなアフィリエイト」を考えながらLittle Mustapha達の行方を捜すとするか。

ニヒル・ムスタファ——そういうことじゃないよー！

このように、最近は全然特集コーナーでなくなっているBlack-holicですが、前回のこのコーナーとの兼ね合いでLittle Mustaphaが失踪したということになってしまったのでこんな感じなのです。(ついでにミドル・ムスタファもいません。)どうやらブログ脳と関連がありそうなのですが…。次回にどうご期待！

サイナラ！

Black-holic #098 「ブログ脳の恐怖 (最終章)」

Little Mustaphaは(ハハ)いないことになっています。それは(ハハ)Black-holicの更新が面倒になったLittle Mustaphaが考えた口実です。最近(ハハ)は、どうしようもないブログ「RestHouse」(ハハ)に書くべき事まで投稿してしまおうようになったので、ここに書くネタがないのです。「ブログ脳の恐怖」というのはここをサボるために生み出された架空の現象です。

しかし、実際にはそうなりませんでした。「ブログ脳の恐怖」を書いてしまったためにLittle Mustaphaは大変な苦勞を強いられることになりました。せっかくここに書くネタが見つかったとしても自分が失踪中であることになっているので、書くことが出来ません。それで、なんとかLittle Mustaphaを都合良く復帰させる手段として「the Poke-Files」が利用されました(episode#015「GONE」)。失踪したLittle Mustaphaをエフ・ビー・エル捜査官達が見事に見つけだして今回から(ハハ)はLittle Mustaphaが書くことになっていきました。しかし、Little Mustaphaはまだ戻っていません。ですから私、ミドル・ムスタファが書いているのです。

(the Peko-Files の話は結構長いので面倒だ！ という人は読まなくても大丈夫だと思います。)

いろんなコーナーをまたいで話を進めるからこんな事になるのです。もう収集はつきません。ブログ脳問題の特集している最中に Little Mustapha は姿を消しました。それからしばらくしてなにくわぬ顔をして帰ってきた Little Mustapha ですが、今度は私の目の前から煙のように消えてしまいました。あれが本当に Little Mustapha だったのかどうかは知りませんが、とにかく消えてしまったのです。魔法みたいに。

それ以来、誰も Little Mustapha の姿を見たものはありません。あの忌々しいブログ「RestHouse」には Little Mustapha 名義でひどい内容の投稿が続いているのに。もう私達は Little Mustapha に会うことは出来ないでしょうか？

Dr.ムスタファ：あの話 (the Peko-Files 「GONE」) によれば彼はコンピューターの中に入ってしまった事になってるんだろ？ それで最後はそのコンピューターのシステムが壊されてみんな助かったみたいなき感じで書かれていたから、きっと Little Mustapha だっどこかにいるんじゃないか？ それに最近ではプロ野球中継を見たり草野球をやったりしてるとあのブログに書いてたぞ。それは彼が現実世界に戻ってきている事の証拠になると思うがね。

ニヒル・ムスタファ：もしかするとヤツはこんな現実世界にはウンザリしていたのかも知れないぜ。くだらない問題に悩み続けなくてはいけないこんな世界よりは、コンピューターの中に作り上げられた架空の世界にいたほうがよっぽど楽なのは誰でも理解出来ることなのさ。あんなにいい加減な感じでやっても、誰だって心の底には暗い問題を抱えているものなのさ。でも架空の世界に肉体ごとはいることが出来るんだったら、出てくる理由は見つからないね。…現実世界の事もブログに書いてるって？ それが現実だと誰が証明出来るんだ？ 今じゃコンピューターの中で二つ目の人生を送れるサービスだってあるんだぜ。その中ではプロ野球中継を見たり草野球をやることだって不可能ではないのさ！

マイクロ・ムスタファ：私は始めからおかしな事になると解っていたんです。だいたい「ブログ脳」というのが脳の特定の状態ではなくて良く解らないキャラクターとして登場した時から変だと思っていたんです。the Peko-Files 「GONE」を読めばそのブログ脳というのが、どういう過程を経て彼の前に現れたのかがある程度は推測出来ますが、Little Mustapha

の書いたあの話は欠陥が多すぎるのです。全てを説明するには書かれていない部分が多すぎます。これは私の書いた「ブログの季節」で書かれている話と非常によく似ています。「ブログの季節」に登場する植部呂具・貴恵太（ウエブログ・キエタ）は自分の肉体全てをブログの記事にする方法を考え出し、何かとつともない…（未完）

このようにLittle Mustapha's Black holeの主要メンバーは好き勝手に言っています。しかし彼らはブログ脳の本当の恐ろしさをまだ解っていないのです。一つの巨大サイトを破壊に追い込みかねないブログ脳の恐怖を。Little Mustaphaがここに戻ってこないとなれば、それは現実のものとなるでしょう。Little Mustaphaだけがあのどうしようもないブログを更新し続け、私達の存在は忘れ去られるに違いありません。ファイル容量の制限で邪魔になったLittle Mustapha's Black holeは内部のコーナーである「RestHouse」だけを残して消去されることだって考えられます。それでもLittle Mustaphaはあの休憩所で休憩し続けるのです。これまでLittle Mustapha's Black holeを裏で支えてきた我々の事など全て忘れて、彼はおバカな投稿を続けるに違いありません。

誰もいないブラックホール・スタジオ（Little Mustaphaの部屋）で一人考えていると、ふとあることに気がつきました。ここに来た時は気付かなかったのですが、この部屋にある電話機の小さなランプが点滅しているのです。これは明らかに留守番電話にメッセージが残されていることを示しているのですが、ここは話を展開させるためにランプの点滅しているボタンを押してみるべきでしょうか？ 押したとしても、私一人しかいないこの部屋でそれほど話が盛り上がるとは思えませんが、話が展開するのなら押してみるしかなさそうです。いつものように留守番電話が機械的に機械的な事を話し始めました。

留守番電話——ピーーッ！ゴゼン・ニジ・ニジュウ・ニ・フン。イッケンデス！

「大変な事になったよ。って言ってもボクが自分の部屋に電話をかけて自分の留守番電話にメッセージを残しても意味はないけどね。もしかすると誰かがボクの部屋に入ってきてこのメッセージを聞いてくれることもあるかも知れないから。…それで、大変な事というのは、あれはミニ・ムスタファだったんだよ。覚えてるかな？ 以前のLittle Mustapha's Black hole内に密かに自分のページを作ってLittle Mustapha's Black holeの乗っ取りを企んでいたミニ・ムスタファだよ！ あのブログ脳というのはボクのブログ脳ではなくて実はミニ・ムスタファの仮の姿だったんだ。詳しいことが聞

きたかったらボクの携帯に電話してくれ！　と言いたいところなんだけど、実はボクは何故かこのどこだか解らない場所にあるネットカフェにいるんだ。本当は自分の部屋にいたはずなんだけど。それで携帯電話はまだその部屋にあるんだ。だからこれを聞いている人は自分の電話でボクの携帯に電話をして一人二役で二つの電話に向かって話をするしかないね。それじゃあ、ボクはなんとかしてそこに戻る手段を考えないといけないからこの辺で。というか、今日のこの留守電話のメッセージはやけに長く録音出来るねえ。いつもは重要な所で録音が終わっているのだけ。まあ、どうでも……」

メッセージオワリ！

全然意味が解りません。ただしミニ・ムスタファというのには聞き覚えがあります。確か、二度目ぐらいのこのサイトのリニューアルでそのミニ・ムスタファのページというのは削除されてしまったはずなのです。ミニ・ムスタファという人は Little Mustapha に深い恨みを持っているということでした。ということは Little Mustapha の身に何かしらの危険が迫っているということかも知れません。

しかし、Little Mustapha との連絡がとれない今、出来ることといえば自分の携帯電話でこの部屋にある Little Mustapha の携帯に電話して二つの携帯を交互に持ち替えて話をする、という Little Mustapha の言っていた良く解らない話を信じることしかありません。

とはいっても、この散らかった部屋に Little Mustapha の携帯電話は見当たりません。もしここにあるのなら電話をかけたら着信音が鳴り出すはずなので、それで見つけられるのですが。仕方がないので Little Mustapha の携帯に電話を試してみることがあります。

電話をかけると部屋の隅の方で淋しい音がしました。Little Mustapha の携帯電話が鳴るのをこれまで一度も聞いたことがありませんでしたが、どうしてこんな淋しい音がするのでしょうか？　今はそこを気にしても仕方がない。とりあえず音のしている方へ行って散乱している本を掻き分けてみると Little Mustapha の携帯電話が出てきました。その電話は確かに鳴っていて、液晶画面には私の名前が表示されています。Little Mustapha の電話で私からの着信を受け

ると何か解るのか？ それで何か解れば面白いので私は Little Mustapha の電話の通話ボタンを押してみました。

66

ミドル・ムスタファア——もしもし、私ですけど。

ミドル・ムスタファア——ああキミか。よく電話してくれたね。やっぱりキミが一番のしつかり者という感じだなあ。

ミドル・ムスタファア——そんな事より、大変な事ってなんなんですか？

ミドル・ムスタファア——メッセージにも残したようにミニ・ムスタファアが何かを始めているんだよ。

ミドル・ムスタファア——良く解りませんが…。

ミドル・ムスタファア——つまり、ミニ・ムスタファアはボクをコンピューターの中に閉じこめて、その間にボクになりすまして Little Mustapha's Black hole を乗っ取るつもりだったらしいんだ。ボクが思うに、これまでここで起きた数々の変な事件は全てミニ・ムスタファアの仕業だよ。でも今回はエフ・ビー・エルの優秀な捜査官が解決してくれたみたいだけどね。

ミドル・ムスタファア——それは、恐ろしい話ですねえ。…あれ？ というかボクはさっきから自分自身と会話をしてませんか？

ミドル・ムスタファア——だから言ったじゃん。一人二役でやってくれって。

ミドル・ムスタファア——ちよつと、待ってくださいよ。全然意味が解りません。

ミドル・ムスタファア——まあ、解らないなら解らないで結構だよ。どっちにしる真実はどこにもない、ゴモオルダア捜査官だからね。

ミドル・ムスタファア——なんですかそれは？

ミドル・ムスタファア——つまり、この前書いた the Peko-Files 「GONE」 に書き忘れた部分をここで説明してるんだよ。

ミドル・ムスタファア——するとこれは the Peko-Files の宣伝でもあるんですね？ というかもう気持ちが悪くなるからこの辺で電話を切っても良いですか？

ミドル・ムスタファア——まあ、言うことは言ったから別にそれでも良いけど。でもさらなるミステリーに関しては謎のままだよ。

ミドル・ムスタファア——そんなミステリーはどうでもいいですよ！ それじゃあ。

という感じで戻ってきた Little Mustapha による「シドル・ムスタファアの懊悩」でした。やっぱりいろんなコーナーをまたいで話を進めるというのは無理でしたね。解ってはいたのですが、思いついたらやってしまうのが決まりなので。

補足

この特別付録で Black-holic の記事を掲載したら余計に解りづらくなったような気がします。なのでちょっとだけ補足を書いておくと、本編の「GONE」の中に登場した「帰ってきた男」というのがつまりミニ・ムスタファだったということです。

スケアリー捜査官と技術者によってコンピューターに入り込んでいた L (Little Mustapha のこと) も現実世界に戻ってきました。それによって Little Mustapha の姿になって彼の家にやって来ていたミニ・ムスタファは Little Mustapha としては存在することが出来なくなり消えてしまった、ということなのです。

こうやって書いてもまだ解りづらいですが、別々のコーナーをまたいで関連した話を書くというのは無理があるようです。

そして、問題になっているのがブログというところになちよつと時の流れを感じますが、今ではさらに何も考えずに適当なことをつぶやける SNS が流行っていたりします。しかし再び「GONE」の悲劇を繰り返さないために私はアレに手を出さないことにしています。

あとがき

シーズンの最終話というのは中途半端なところで終わる、というのはthe Peke-Filesでも同じ。本物の方（the X-Files）や他のドラマシリーズの最終回が中途半端なのは、元はそこでドラマを打ち切りにさせないための作戦だったということですけど。ただthe Peke-Filesの場合は面倒になったらやらなくなるし、やりたい時にはどんな内容でもやるのですが。

そんな最終話の収録された縦書きPDF版の第四巻です。シーズン1の最終回は全く本物の方を意識しない内容でしたが、シーズン2では話の流れはほぼ本物の方と同じになっています。パクリじゃなくてパロディなのですが。

ただアメリカと日本の違いだったり、それまでの書いてきたことに関連して矛盾のないようにするためだったり、ちょっと無茶な感じもあつたりします。しかし、そんな中モオルダア捜査官が何も解ってない感じなのにどんどんドラマが進んで行くというのはちょっと面白いと思えました。あらかじめ話の中身が決まっている時には主人公が何も解ってなくても話は進んでしまうようです。

それから、シーズン2の途中から登場していたAKBというキーワードがあるのですが、シーズン2以降はかなりほったらかしな状態でもあります。なぜかというところはまだ一部のマニアだけで盛り上がっていた感じのAKBなところか、次第に人気が出てきて今では、どこもかしこもあいつらばっか。なのでAKBというキーワードが使いつらくなってしまったのです。

本物の方でマジエスティックという単語が出てきて、それは良く「MJ12」と略される「マジエスティック12」のことを言っているのだと思った私が、パロディとしてアルファベットと数字の組み合わせということでAKBというキーワードを使ったのですが、こういうのはヘタに使うものではない、という事のようにです。

そして、シーズン終了後のお楽しみ「シーズン2の真実」とか、その他のオマケですが、シーズン2は書くのに時間がかかりすぎて、各エピソードに関しての個人的な感想というか、思い入れが薄れてしまっていたりして、ちょっと物足りない感じもあります。

しかし、登場人物が話を振り返るシリーズの中に、ばあやの衝撃の発言とか、その辺は面白かったです。

そのあとのオマケで「Blackholie」のいくつかの記事も載せました。載せたところで結局なんだか解らないという感じになってしまったのですが、書いた時にはあれでちゃんと説明出来ていると思っていたのです。まさしく「ブログ脳」という感じですけど。すまないと思ったので最後に補足として、チョットした解説を付け足しておきました。

逆にBlack-holeにペケファイル課の二人が登場することはあるのですが、そっちはけっこう上手く知っているような気はするのです。厳密には上手くいってないかも知れませんが、どちらかというところBlack-holeの方がユルい内容が許されるので、それで上手くいっているように思えるのかも知れません。
そう考えると色々面白いシーズン2ではありました。

2015年3月 Little Mustapha

著者に訊く？

名前 Little Mustapha

経歴 知るもんか！ 知るもんか！

ホームページ Little Mustapha's Black-hole (<http://bit.ly/1NUZQ5>)

コンタクト little.mstph@gmail.com